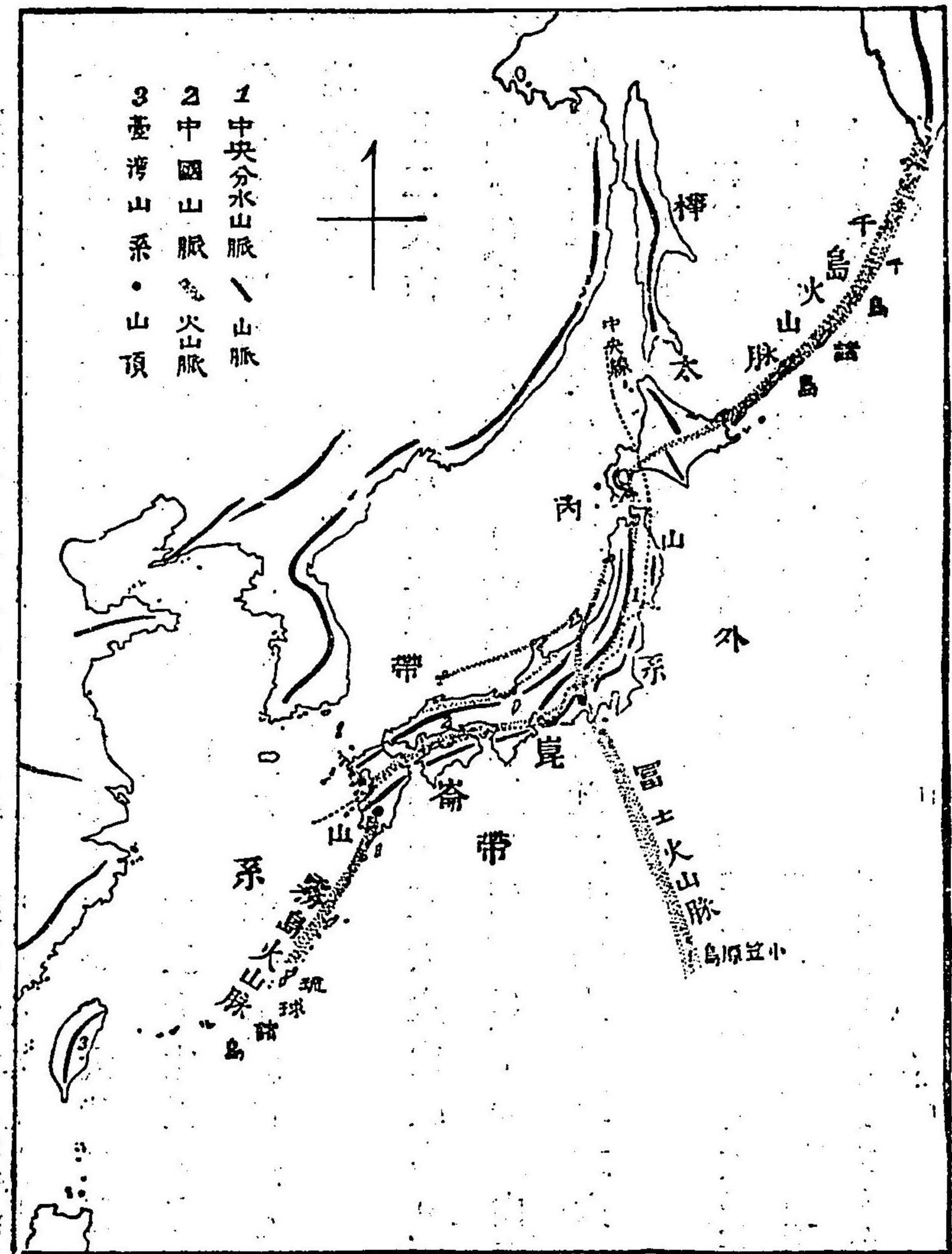


日本地勢略圖



天然

一七四

山系

崑崙山系  
地方

樺太山系  
地方  
千島墳火  
山脈

(山系)

帝國の山脈は、既に述べたる二大山系より成る、左にこれを畧述せん。

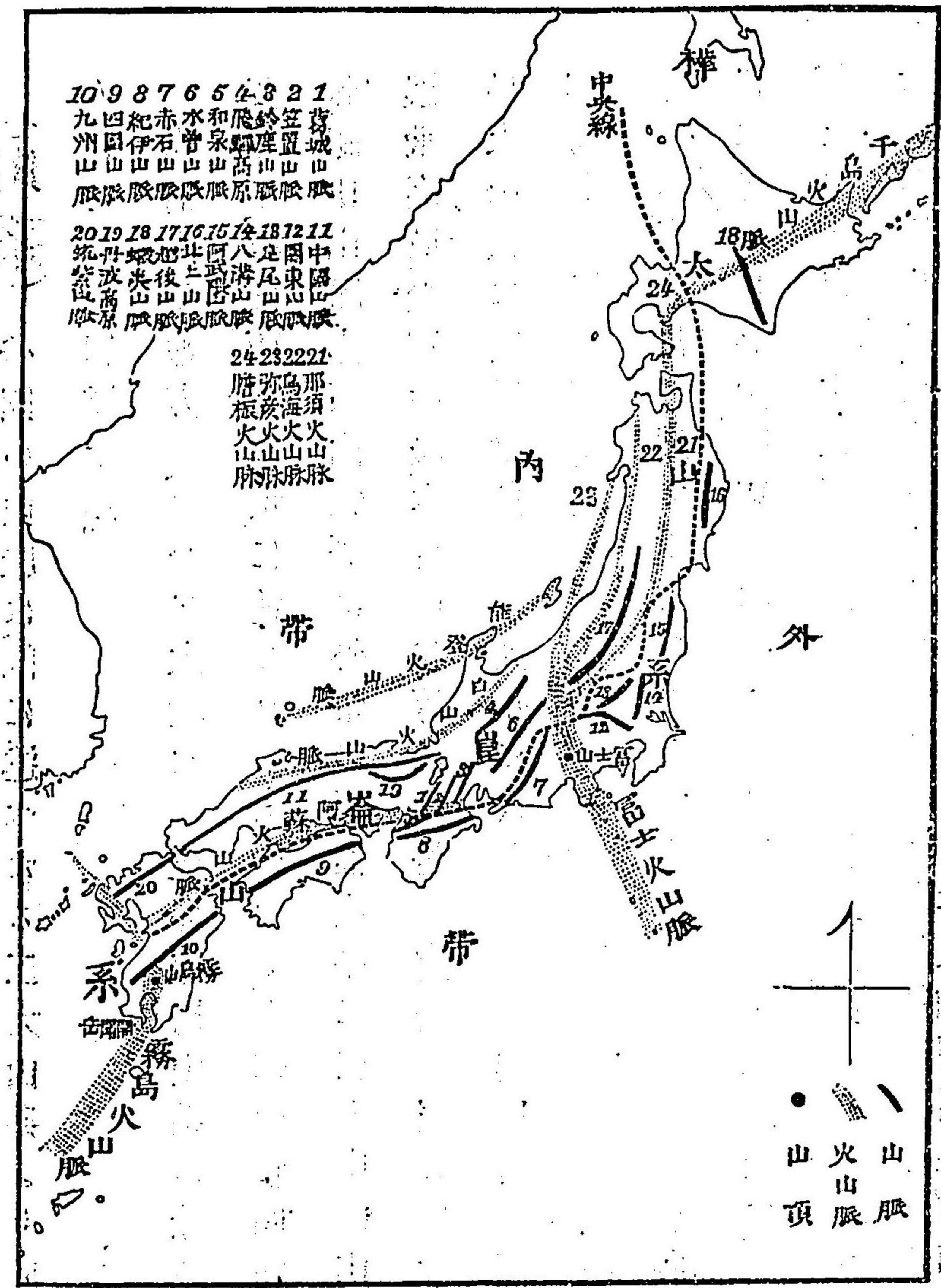
崑崙山系地方は、アジア大陸なる支那崑崙山系の餘波を受けて、畧ぼ西より東に連なれるものなり。九州山脈四國山脈、紀伊山脈、赤石山脈等は外帯の崑崙山系に屬し、中國山脈、濃飛高原、飛驒山脈、木曾山脈等は内帯の崑崙山系に屬す。霧島火山脈は、琉球諸島より九州に入り、開聞岳、櫻島岳を経て霧島山を起し、稍、西北に折れ、温泉岳、多良岳に連る。樺太山系地方は、樺太島と通ずるものにして、略ぼ南北に連亘し、北海道にては、日高山脈、東北山脈これに屬す。千島火山脈は、知床岬より、本島の中央部に走り來りて、樺太山系を横きる。又噴火灣の沿岸に、火山脈あり、本州にては、北上山脈、阿武隈山脈、

天然地勢

一七五



# 山脈



足尾山脈、關東山脈等は、外帯の樺太山系に屬し、中央分水山脈及び陸奥山脈等は、内帯の樺太山系に屬す。

富士火山脈は、其脈遠く太平洋より來り、小笠原群島、豆南諸島を經、伊豆半島を通じ富士山を起し、八岳を經て焼山に至る。

## 富士火山脈

本邦最大の火山脈

### 地震

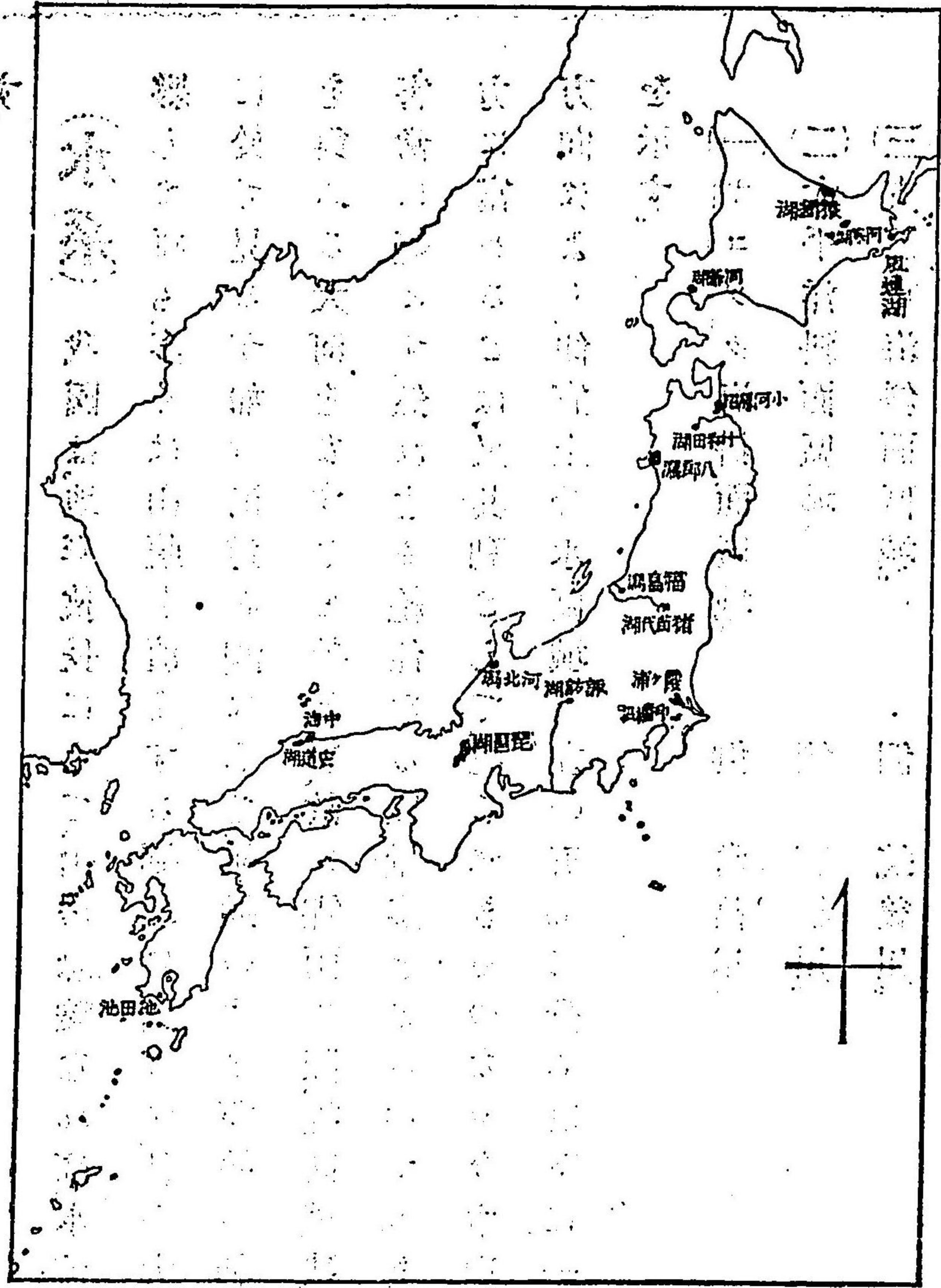
本邦は、世界中有名なる火山國にして、又有名の地震國なり、微震をも通算するときは、殆んど日として地震なきはなし。本邦地震の原因は、二種あり、一を火山地震といふ、火山破裂の爲に、近傍の土地震動するものにして、其區域狭く、其數亦少し、彼の磐梯山破裂の時の地震は、即ちこれなり。一を地沈地震といふ、地層の沈り落つるが爲に震動するものにして、其區域最も廣く、其數亦多し、彼の濃尾大地震は此種に屬す。







# 湖沼



縮尺五千五百分 一

## 湖沼

（四）日本海斜面區域。例、石狩川。  
湖沼の生成する原因に種々あり、我邦にて最も多きは、左の如し。

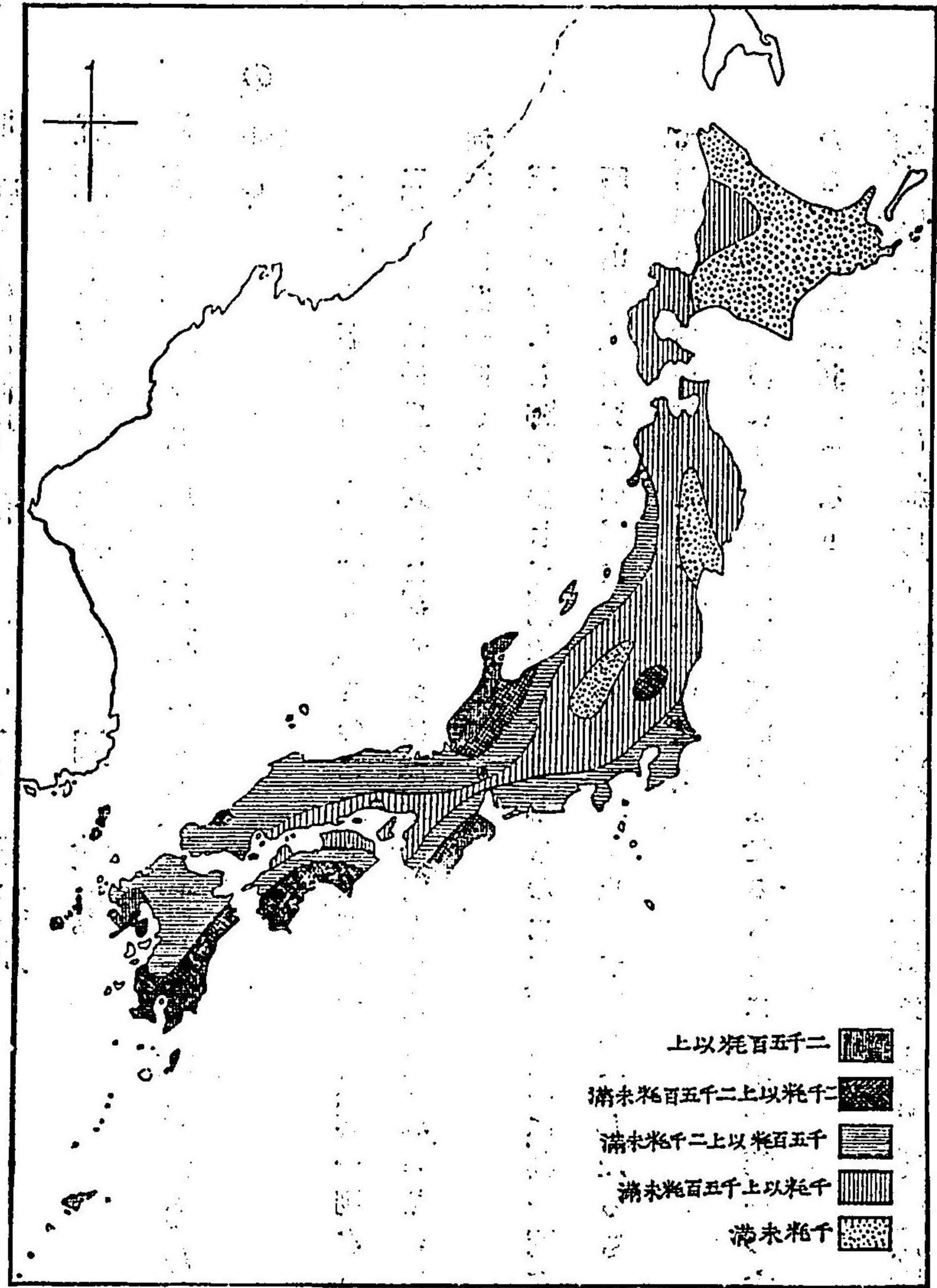
- 一、火山の舊噴口に、水の溜りしものにて、池田湖の如きは、其一例なり。
- 二、沙嘴又は砂丘の爲めに、河水又は海水停滯して、湖となるものにて、河北湖は、其一例なり。
- 三、河の流れし跡の變じて、湖水となりしものにて、印旛沼は、其一例なり。
- 四、火山の噴出又は山崩により、溪流を堰き止めて、湖をなしたるものにて、磐梯山麓原湖の如きは、其一例なり。
- 五、地盤の陥没により、流水滞りて、湖をなせるものにて、本邦第一の大湖たる琵琶湖は、其一例なり。

## 氣候

（氣候）氣候は、緯度、地勢、海流等の差異によりて變化す。



本邦全年之雨量



天然地理

一八二

我國の氣候は多様なり

本邦は、北緯二十一度四十五分より、全五十度五十六分に互り、地勢頗る變化に富み、加ふるに、海流の影響あるを以て、氣候の變化少からず。而して、西北には、アジア大陸を控へ、東南は、太平洋に臨み、山脈中央に連亘するを以て雨雪多く、夏季は、南風或は南西風、太平洋より多量の濕氣を送り、九州、四國の南部及び紀伊の南端、並に東海道沿岸、降雨多し。冬季は、これに反して、北風或は西北風、日本海の濕氣を齎し來るにより、北陸、山陰兩道の地降雪甚し、唯北海道及び瀬戸内海沿岸は、雨雪の量少なし。

冬季の温度は、九州の南端より、犬吠岬に至る海岸の地は、大差なし、これに反して、犬吠岬より北海道根室に至る間は、差異甚し。

日本海沿岸にありては、長崎より宗谷に至るまで、其差外帯の如く甚し

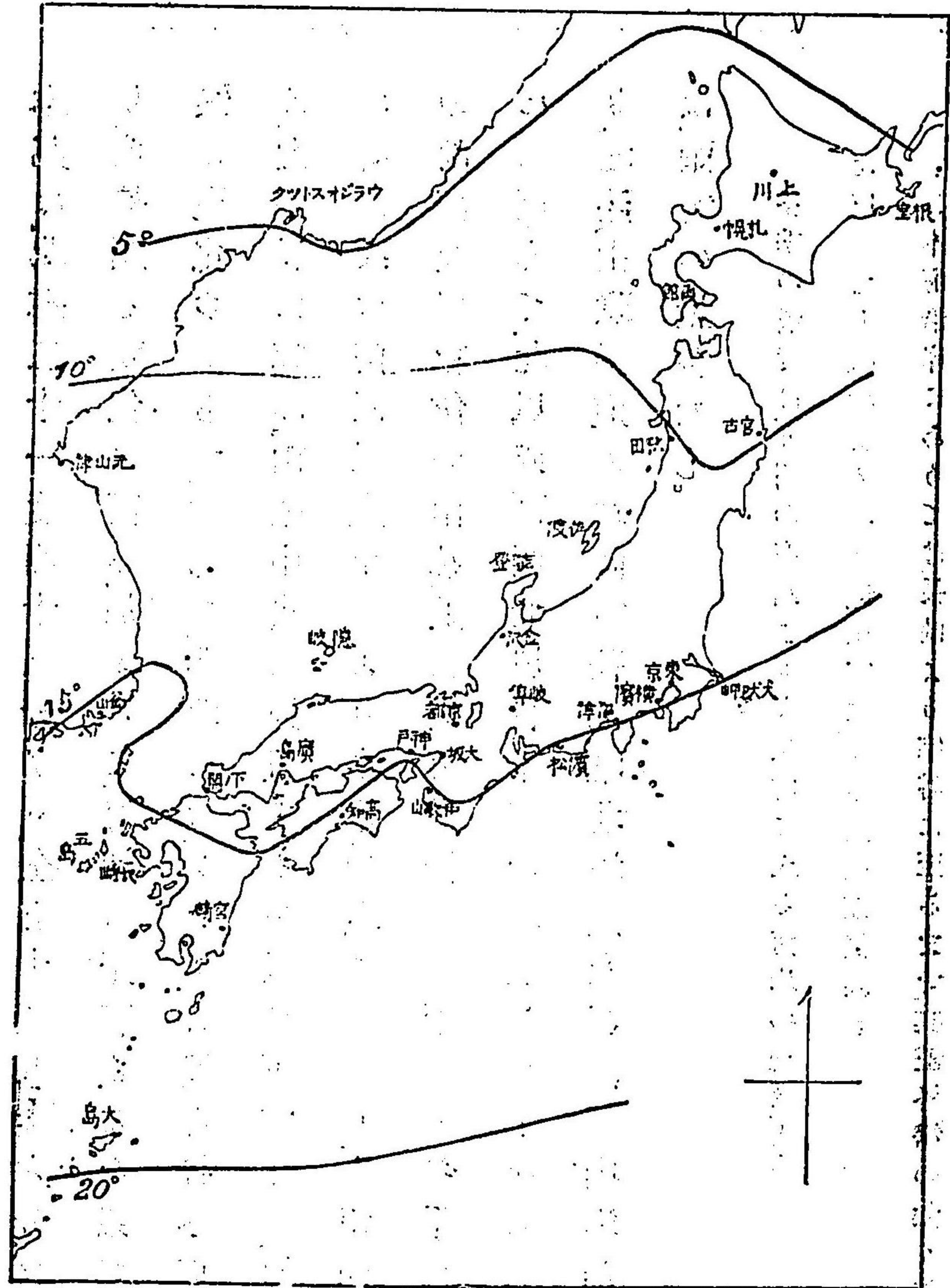
天然地理

一八三

氣温



### 全年平均等温線



縮尺 五千百分の一

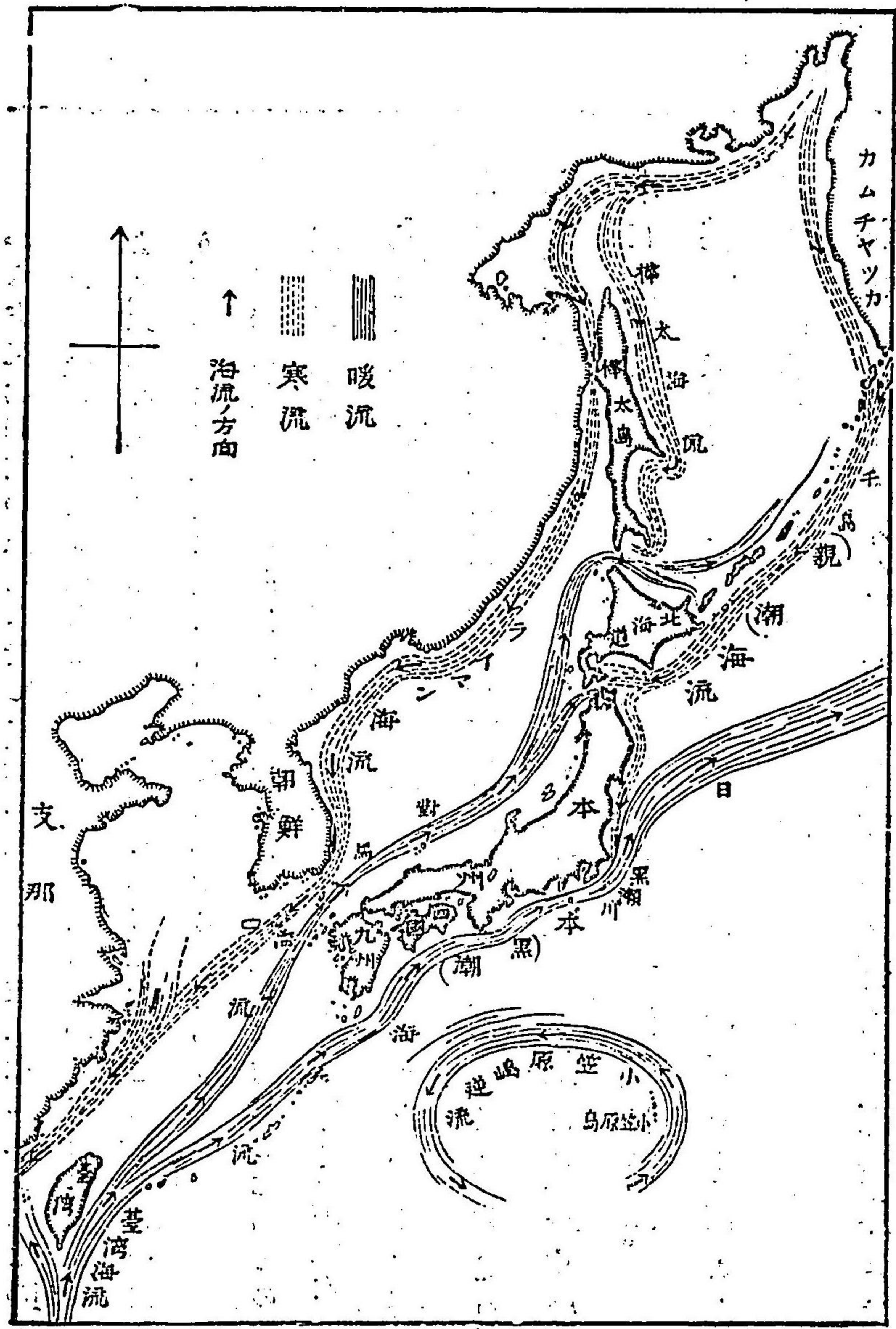
### 颶風

霖雨  
霖雨は梅雨五  
月雨又は微雨  
と稱し大約三  
十日に亙る  
海流

からず、又北海道の上川に於ては、最低温度以下三六・七に及ぶことあり。夏季(八月)の温度は、概して冬季の如く差異甚しからず、特に九州の南端より、犬吠岬に至る海岸の地は、暑、一様にして、二七度と二五度との間にあり、此季節には上川に於ても三五度に達することあり。臺灣は夏季温度の差異少けれども、冬季の温度は南部と北部との差異頗る甚し、これ北部は、冬季黄海より来る寒流の影響を受くるが故なり。九月上旬より中旬の間には、颶風吹き来るを常とす、古來より陰曆二百十日、二百二十日の厄日と稱するものこれにして、其本は、通常フィリッピン群嶋邊より始まり、多くは東北に進み、九州、四國を過ぎ、本州を経て、北海道に及ぶ。霖雨は、六月頃に降り、陰雨濛々、連日開かざるを常とし、暴雨は、九月頃に起り、常に颶風に伴ふ。海流は、著しく本邦の氣候を左右す。抑も本邦沿岸には、寒



日本近海之海流



天然地理

一八六

暖流

黒潮の通過する所は魚類の産物多し

寒流

親潮の通過する所は昆布其他の産物多し  
寒流二流の會する所海霧多し

暖の二流あり、暖流は、日本海流、黒潮にして、臺灣島の東より、琉球諸島の西を流れ、宮古島の北方にて二分し、本流は、九州、四國の南岸を洗ひ、豆南諸島に達し、御倉島、八丈島間の黒瀬川となり、犬吠岬の沖より、本州を離れて、遠く太平洋中に去る。支流は、對馬海流と稱し、九州の西岸に沿ひ、對馬海峽を経て、日本海に入り、遂に二派に分れ、一は宗谷岬に進み、一は津輕海峽を過ぎて、太平洋中に隱る。寒流には、三派あり、千島海流、樺太海流、ライマン海流これなり、千島海流(親潮)は、オホツク海に發し、千島列島の間を過ぎて二分し、一は、宗谷岬に至り、一は、北海道の東岸より、本州の犬吠岬附近に至る。樺太海流は、樺太島の東岸に沿ひて南流し、宗谷岬に近づき、ライマン海流は、東部アジアの海岸に沿ひ、對馬附近に至る。

天然地理

一八七



天産

植物

動物

礦物

(天産) 我國は、熱帶、溫帶に跨り、高山、嶺、海洋繞り、雨量多く、地味肥沃なるを以て、天産甚だ豊なり。植物は寒、溫、熱、三帶のものを併せ有し、到る處に森林鬱蒼たり、臺灣、琉球等の平地には、榕樹あり。本州の高山には、白檜あり、其頂上には、偃松ありて、其種類一ならず。動物は、植物の如く、其區域判然たらざれども、溫帶性のもので、全國到る處に産す。

南方の陸産には、猿、毒蛇、鹿、兎、狐、多く、海産には、太平洋に鯨、鮫、鮪、牡蠣、日本海に鯛、烏賊等多し。

北方には、熊、狼、鯨、鮭、鱈等多く、千島は、紅鯨、海獺、海豹、馴鹿の類多し。礦物中有用にして、産額多きものを舉ぐれば、銅及び石炭を第一とし、金、銀、鐵、硫黃、アンチモン、滿庵、石油、石灰石、水晶等これに次ぐ、外に花崗石等の建築石材あり。

## 第二章 住民

### 種族

#### 大和民族

アイヌ種は古昔本州の中央に居り、以東にも住居せり。

琉球種  
移住支那

人 蕃人  
衣 蓄人  
食

(種族) 我日本民族は、世界五人種中のモンゴリア人種に屬し、皮膚黄色にして、頭丸く、顔は平にして、頬骨出で、毛髮黒く、鬚髯多からず。言語、風俗、習慣、思想を一にし、二千五百餘年來列聖の鴻恩に浴し、忠勇武烈の精神に富む、所謂日本民族なり。この外に、北海道のアイヌ種族あり、又臺灣には支那より移住せしものと、蕃族とあり。

琉球種族は、大和民族に似たれども、少しく異なる點あり。

アイヌ種族は、鬚髯長く、全身毛多く、風俗習慣大に異れり。

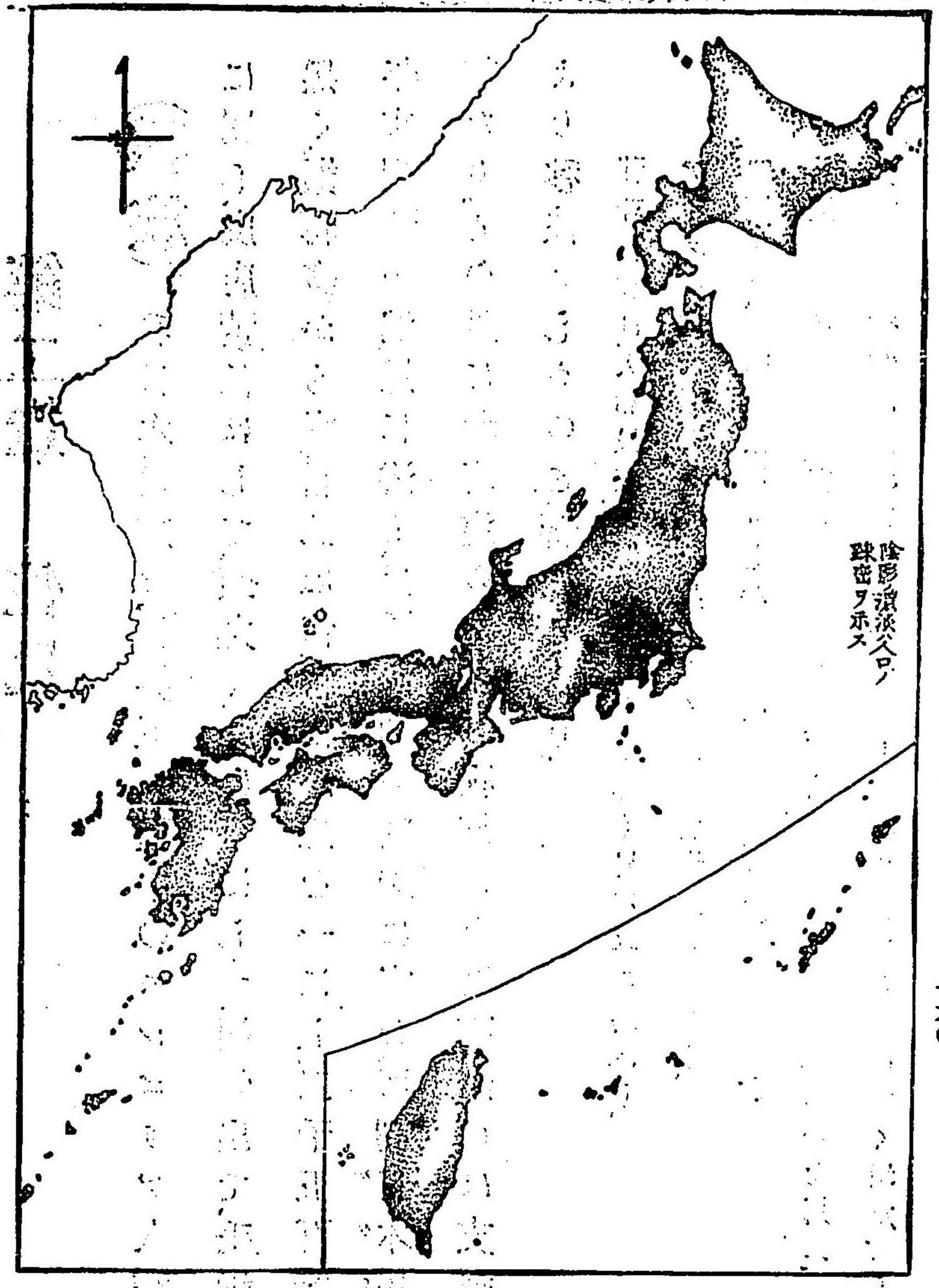
我國民は、古來質素なりしか、近來は稍華美を好む風あり。

普通人民の衣服は、概ね綿布にして、富者は、絹布、毛織物、麻布等を用ふ。

食物は、米、麥等の穀物及野菜を主とし、近來肉食するもの漸く増加せり。



人口之疎密



住民

一九〇

住

四族

人口

我國は人口の増殖著しき國の一なり

家屋は概ね木造にして都會には煉瓦造を見る。日本風、西洋風及び和洋折衷等の別あり。

我國人は頗る優美の風ありて、機敏の性を備ふ。然れども稍事に倦みき缺點あるは思ふべき事とす。

我日本民族には、皇族、華族、士族、及び平民の別あり。

皇族は、歴代天皇の御血統なれば、尊嚴にして犯すべからず。

華族は、歴世皇室に直隸せし名族。維新前各地方に分封せられたる舊諸侯、並に國家に勳功ありて、新に爵位を賜はりたるもの等なり。現今尙政治上に多少の特權を有し、社交上の位置も、稍、士族及び平民に異なれり。

士族は、維新以前舊諸侯に隸屬せしものにして、所謂武士なるものなり。平民は、もと農工商の業に従事し、士班に列せざりし多數の庶民をいふ。

(人口) 人口は、近來益増殖の機運に向ひ、増加の割合年々凡四十萬を超ひ、現今の總人口凡四千五百餘萬に達す。其人口の稠密なること、世界中比類少し。

住民

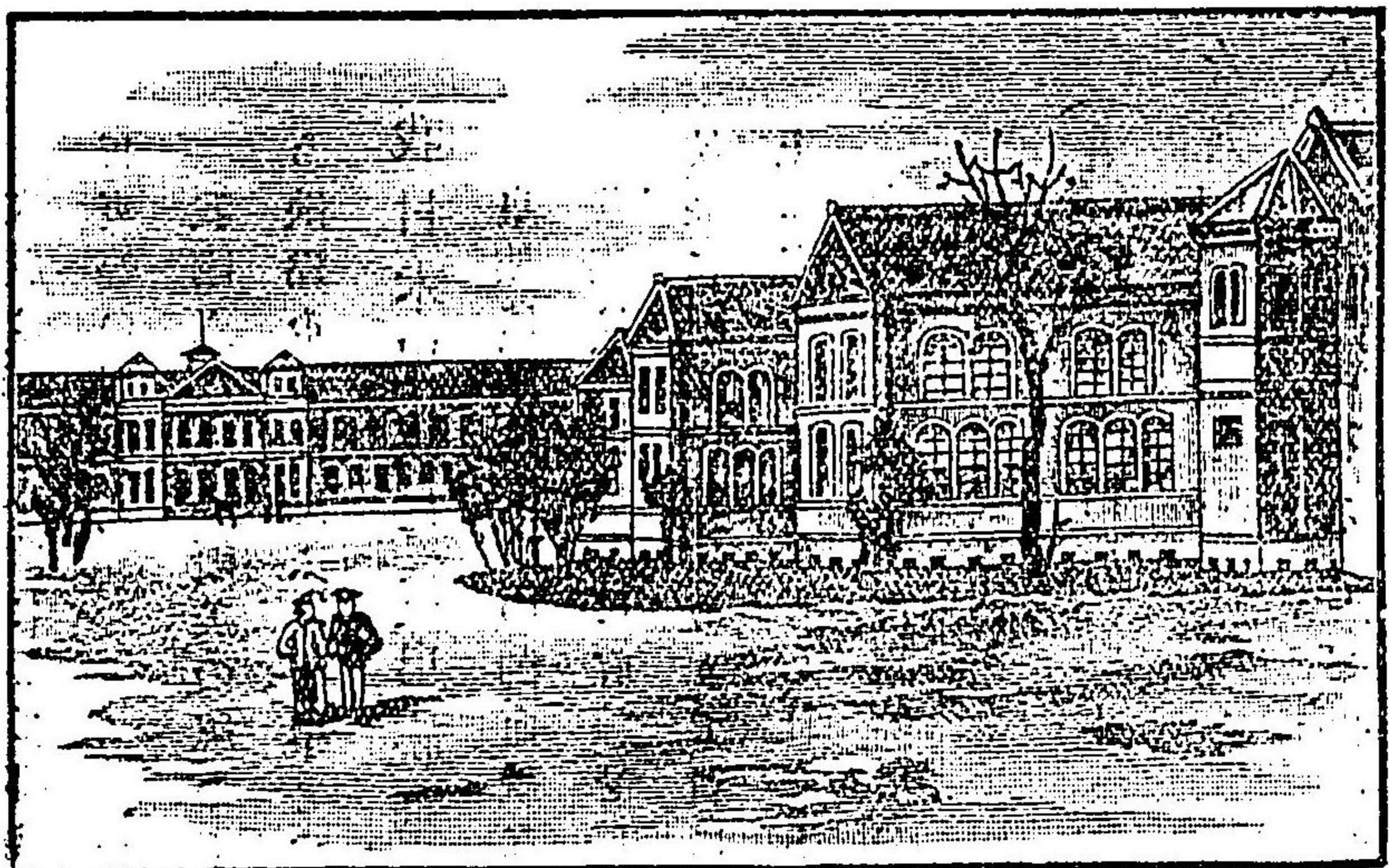
一九一



# 教育

京都帝國大學  
は諸分科未だ  
備はらず

住  
民



一九二

## (教育)

維新後、學制の發

布、教育の獎勵により、大小の  
學校盛に起り、現今學齡兒童  
中、不就學者は、殆んど十分の  
三となれり。高等教育には、東  
京及び京都に帝國大學あり  
て、法、醫、工、文、理、農の六分科及  
び大學院を設く。北海道の札  
幌農學校は、農科大學に準ず  
る専門學校なり。高等學校は  
東京、仙臺、京都、金澤、熊本、岡山  
及び山口の七ヶ所（南見山）にありて、

# 文事

中等以上の業務に就かんごするもの、及び大學に進むもの  
の階梯となす。陸海軍將校の養成には、陸軍大學校、海軍大學  
校、陸軍士官學校、海軍兵學校等あり、教員養成には、東京に高  
等師範學校各府縣に師範學校の設あり。又府縣に中學校及  
び高等女學校あり、小學校は其數凡二萬七千餘校あり。其他  
公私の設立に係る法律、商業、工業、農業、音樂、美術等の専門學  
校頗る多し。

書籍館及び博物館は、其數尙は少けれども、帝國圖書館、帝國博物館（東京）  
帝國京都博物館、帝國奈良博物館等は、政府の管理に屬し、規模稍大なる  
のなり。著書及び新聞雜誌等の發行も、亦年々増加するを見る。即ち發行の  
圖書毎年二萬五千部に達し、定時發行の新聞雜誌凡八百種、一ヶ年の發行  
部數四億に及ぶ。

# 美術

## (美術)

我國の美術は、其淵源遠く三韓交通の昔にあり、

住  
民

一九三

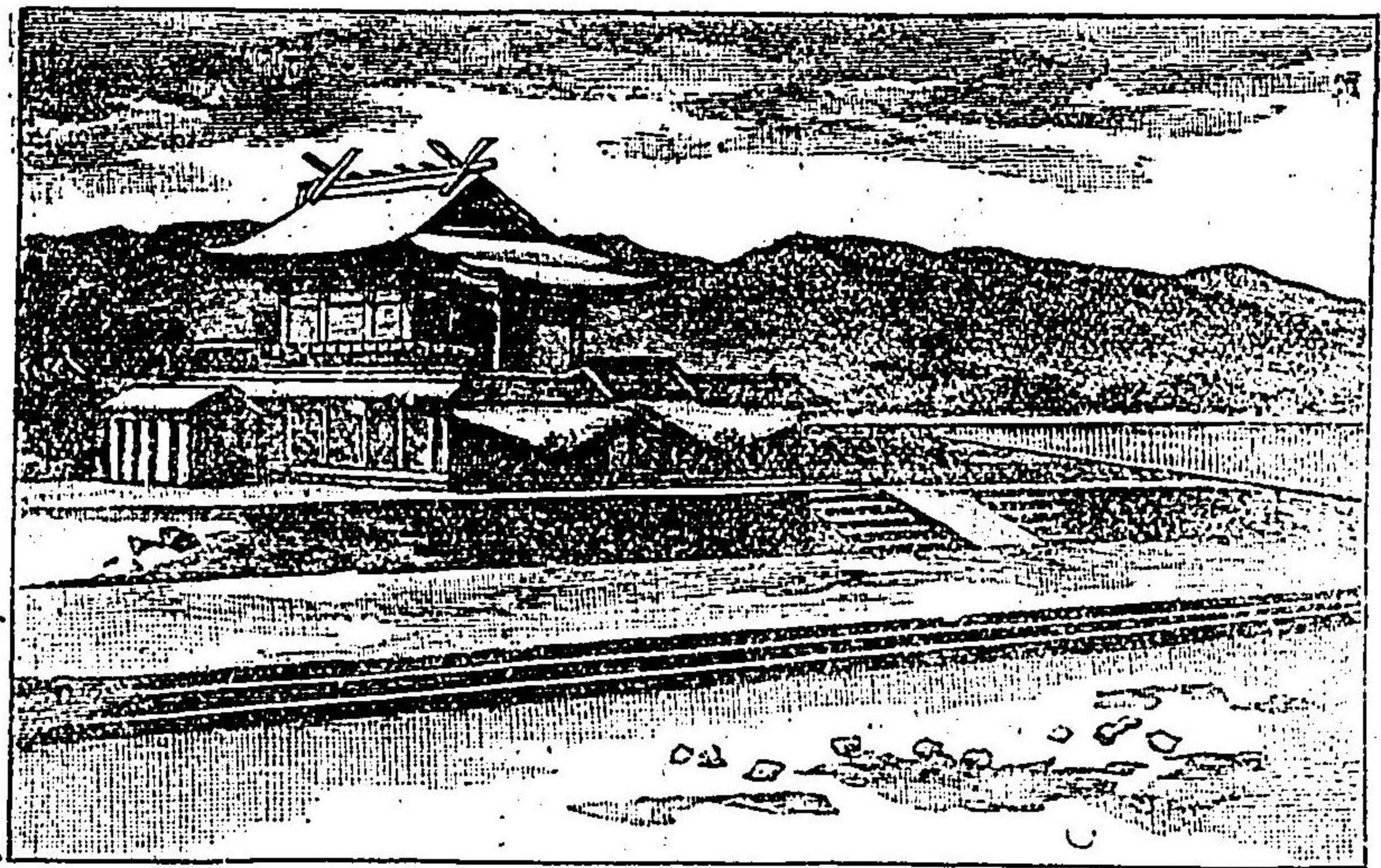


奈良京都等に  
遊び見よ

狩野派土佐派  
南畫浮世繪等  
の畫法

### 宗教

### 神道



住  
民

一九四

後佛法の傳來と共に佛畫佛  
像の製作術大に發達し、次で  
支那隋、唐、明の畫風を傳へ、多  
少の變遷を経て、遂に一種獨  
得の日本畫法を發明せり。其  
他陶、磁器、漆器等の技術も亦  
大に發達し、本邦美術の名海  
外に高し。

社  
（宗教） 本邦に於て、宗教  
と見るべきもの三あり、神道、  
佛敎、基督教これなり。神道は  
祖宗の威靈を祭祀じ、又は國

### 佛敎

### 基督教

靖國神社は東  
京市麴町區九  
段坂上にあり  
戦死者及びこ  
れに準ずるも  
のを合祀す

家に勳功ありたる、武將、賢哲等を崇拜するものにして、別に  
經典と稱すべきものなく、稍他の宗教と趣を異にす。佛敎は、  
欽明帝の朝初めて傳はり、爾後幾多の盛衰ありしと雖も、明  
僧知識を出せしこと少なからざるを以て、現今尙ほ多くの  
信徒を有す。基督教は、後奈良帝の朝渡來し、一時全國教徒の  
數三十萬に達し、も、其後國禁となりしが、維新後漸く行は  
れて、信徒は開港場及び關東に多し。

現今伊勢神宮を初め、熱田神宮、出雲大社、湊川神社、靖國神社、琴平神社等  
の官國幣社の數百六十七、府縣社の數四百八十六あり。

佛敎には、天台、眞言、淨土、臨濟、曹洞、黃檗、眞、法華、時融、通念、佛法、相、華嚴の十  
二宗あり、東西兩本願寺、知恩院、延曆寺、高野山、身延寺以下の寺院、合計凡七  
萬二千、外に境外佛堂三萬八千餘あり、住職の數五萬六千餘人あり。

我邦の基督教には、天主教、羅馬教、正教、希臘教、新教（プロテスタント）の三

住  
民

一九五



種あり、東京にはニコライ會堂中央會堂等有名なる教會堂あり、

### 第三章 政治

政體  
統治權

帝國議會

行政部  
宮内省は帝室  
の事を掌り、  
行政部の外な  
り

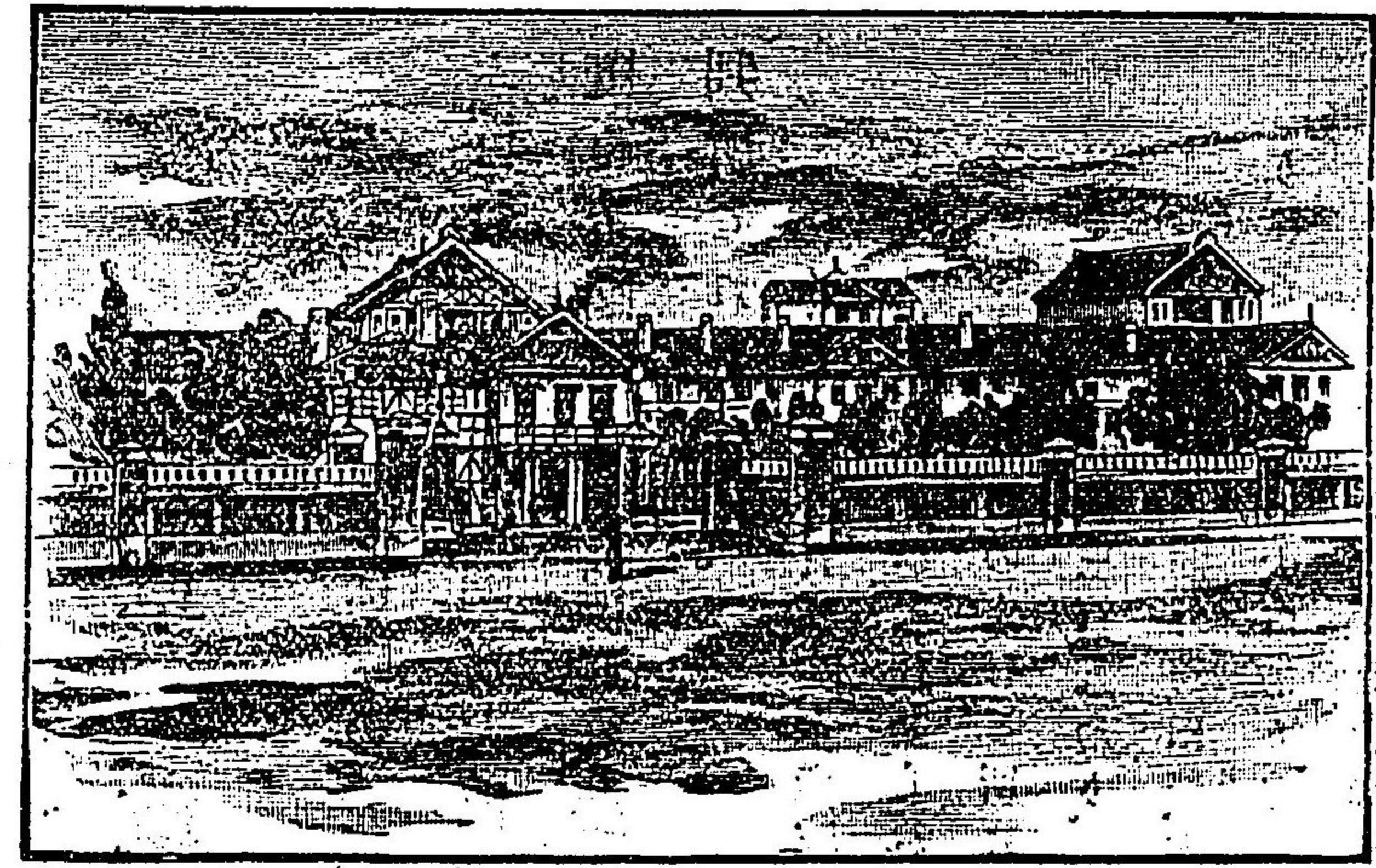
(政體) 天皇は國の元首にして、統治の大權を總攬し給ふ。百般の政務は、國務大臣輔弼し奉りて、其責に任じ、立法は、概ね帝國議會の協賛を要し、司法權は、天皇の御名に於て、裁判所これを行ふ。

(一) 帝國議會は、貴族院、衆議院より成る。貴族院は、貴族院令の定むる所により、皇族、華族及び勅任せられたる議員を以て組織す。其數凡三百人あり。衆議院は、選舉法の定むる所により、各府縣に於て公選せられたる議員を以て組織す。其數三百人あり。

(二) 行政部は、内閣、外務、内務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、逓信の九省あり。各省に主務の大臣ありて、内閣總理大臣これを統一す。地方には道廳に長官、府縣に知事ありて、主務大臣の指揮監督を受け、部



司法部



内の政務を行ふ道廳府縣は又これを小分して市區郡とす市區郡には各其長あり又郡は更に細分して町村となす町村にも各其長あり須要なる島地には特に島司を置きて支配せしむ

國 (三) 司法權を行ふ裁判所には區裁判所、地方裁判所、控訴院及び大審院の四級あり大審院は最高裁判所に於て東京に唯一あり控訴院は東京、大阪、名古屋、廣島、長崎、仙臺、函館の七個所にあり地方裁判所は各府縣に各一、北海道に三あり區裁判所は最下級のものにして三百餘あり

臺灣には天皇の親任せられたる

區劃

臺灣總督ありてこれを支配す總督府は臺北に在り地方には縣及廳を置き縣に知事廳に長を置き部内の政務を行はしむ

**(區劃)** 全國を畿内八道に分ち更にこれを八拾四國に分つ琉球臺灣は此外なり

古來關八州と稱するは相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、上野、下野にして又これを關東と呼ぶことあり東山道の中、近江、美濃、飛騨、信濃、上野、下野の六國を中仙道と稱し磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後、羽前の七國を奥羽或は東北地方といふことあり又山陰、山陽の兩道を合せて中國とも稱す

普通行政の區劃は専ら其時の便利に従ふを以てこれを變更することなきにあらず現今は北海道及び三府四十三縣となれり臺灣は此外にあり

**(兵備)**

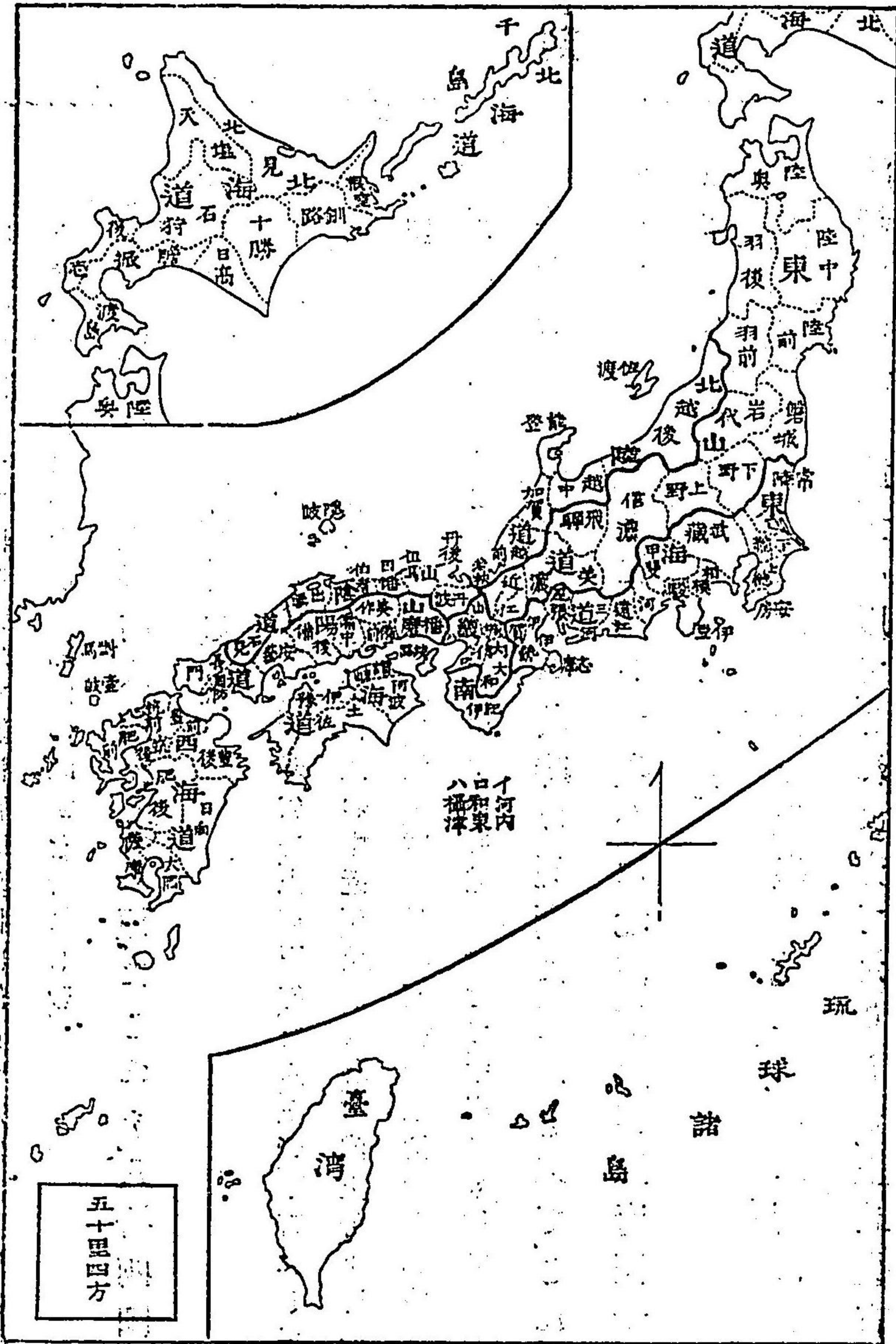
我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にして、維新前は全く武士を以てこれに充てたりしが、王政復古と

兵備

行政區劃



畿道國別



政治

二〇〇

兵役の種類

共に、帝國の男子は、滿十七歳より四十歳まで、悉く兵役の義務を有することゝなれり。兵役は、常備、後備、補充、國民の四種に分れ、常備兵役は、更に現役、豫備役の區別あり、補充兵役も、陸軍には、第一補充兵役、第二補充兵役の二種あり、國民兵役も亦第一國民兵役、第二國民兵役に分る。

徴兵適齡は、滿二十歳にして、此時初めて常備兵役に服す。但し海軍は、沿海地方及び島嶼より、これを募集す。

常備兵役の現役は、陸軍三年、海軍四年、同豫備役は、陸軍四年、海軍三年なり。

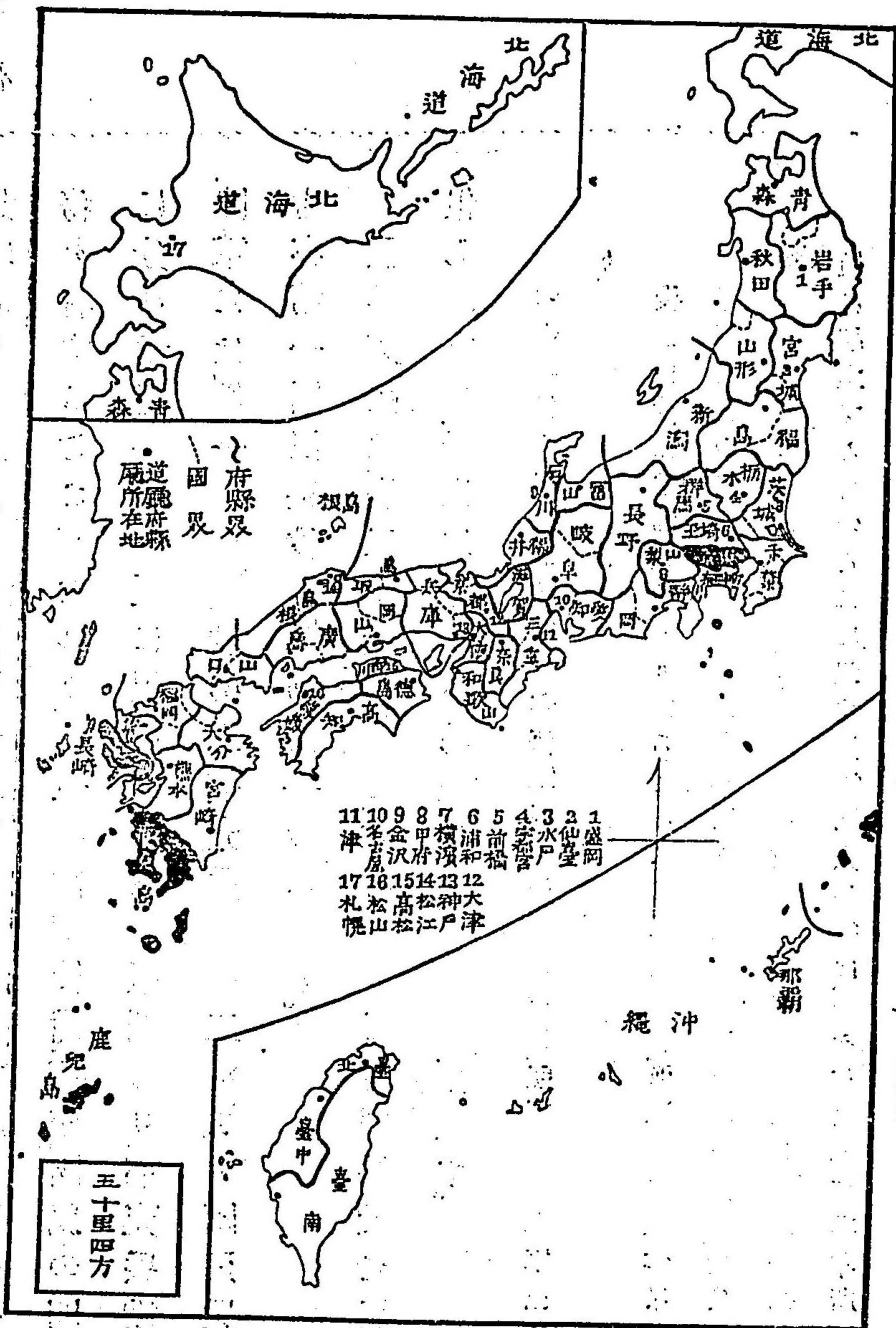
後備兵役は、常備兵役終りたるものこれに服し、陸、海軍共に五年なり。補充兵役の第一補充兵役は、七年四ヶ月にして、其年所要の現役兵員に超過するものこれに服し、第二補充兵役は、一年四ヶ月にして、第一補充兵員に超過するものこれに服す、海軍補充兵役は、一ヶ年にして、其年所要の

政治

二〇二



# 行政區劃



政治

11011

## 陸軍

### 陸軍の編制

現役兵員に超過するものこれに服す、國民兵役は、常備、後備及び補充兵役以外のもの及びこれ等の兵役を終りたるものこれに服す。

全國の陸軍を、近衛及十二師團に編制す、一師團は、通常歩兵二旅團、騎兵一聯隊、野戰砲兵一聯隊、工兵一大隊、輜重兵一大隊より成る、而して一旅團は二聯隊より、一聯隊は三大隊より、一大隊は三中隊より成る、一師團の兵は、凡一萬人あり、師團長は中將、旅團長は少將、聯隊長は大佐、若くは中佐、大隊長は少佐、中隊長は大尉、これに當る。

今陸軍常備兵配置中、重要な事項を畧表にして左に示す。

師團		旅	步	兵
號	司令部所在地			
第一	東京	第一	第一	第一
第二	東京	第二	第二	第二
第三	東京	第三	第三	第三
第四	東京	第四	第四	第四
第五	東京	第五	第五	第五
第六	東京	第六	第六	第六
第七	東京	第七	第七	第七
第八	東京	第八	第八	第八
第九	東京	第九	第九	第九
第十	東京	第十	第十	第十
第十一	東京	第十一	第十一	第十一
第十二	東京	第十二	第十二	第十二
第十三	東京	第十三	第十三	第十三
第十四	東京	第十四	第十四	第十四
第十五	東京	第十五	第十五	第十五
第十六	東京	第十六	第十六	第十六
第十七	東京	第十七	第十七	第十七
第十八	東京	第十八	第十八	第十八
第十九	東京	第十九	第十九	第十九
第二十	東京	第二十	第二十	第二十
第二十一	東京	第二十一	第二十一	第二十一
第二十二	東京	第二十二	第二十二	第二十二
第二十三	東京	第二十三	第二十三	第二十三
第二十四	東京	第二十四	第二十四	第二十四
第二十五	東京	第二十五	第二十五	第二十五
第二十六	東京	第二十六	第二十六	第二十六
第二十七	東京	第二十七	第二十七	第二十七
第二十八	東京	第二十八	第二十八	第二十八
第二十九	東京	第二十九	第二十九	第二十九
第三十	東京	第三十	第三十	第三十
第三十一	東京	第三十一	第三十一	第三十一
第三十二	東京	第三十二	第三十二	第三十二
第三十三	東京	第三十三	第三十三	第三十三
第三十四	東京	第三十四	第三十四	第三十四
第三十五	東京	第三十五	第三十五	第三十五
第三十六	東京	第三十六	第三十六	第三十六
第三十七	東京	第三十七	第三十七	第三十七
第三十八	東京	第三十八	第三十八	第三十八
第三十九	東京	第三十九	第三十九	第三十九
第四十	東京	第四十	第四十	第四十
第四十一	東京	第四十一	第四十一	第四十一
第四十二	東京	第四十二	第四十二	第四十二
第四十三	東京	第四十三	第四十三	第四十三
第四十四	東京	第四十四	第四十四	第四十四
第四十五	東京	第四十五	第四十五	第四十五
第四十六	東京	第四十六	第四十六	第四十六
第四十七	東京	第四十七	第四十七	第四十七
第四十八	東京	第四十八	第四十八	第四十八
第四十九	東京	第四十九	第四十九	第四十九
第五十	東京	第五十	第五十	第五十

政治

11011











政 治

- 第一海軍區 横須賀鎮守府 横須賀
  - 第二海軍區 吳 鎮守府 吳
  - 第三海軍區 佐世保鎮守府 佐世保
  - 第四海軍區 舞鶴鎮守府 舞鶴
  - 第五海軍區 室蘭鎮守府 室蘭
- (舞鶴及び室蘭鎮守府を設置するまで第四海軍區中、越後以東及び第五海軍區を横須賀鎮守府に、第四海軍區中、越中以西を吳鎮守府に管せしむ)
- 此他内外國に於て建造中の艦船少からず。
- 海軍の軍令部は、出師、國防、作戰の計畫を司るのみならず、又教育訓練を監督す。
- 海軍軍人を養成する學校には、海軍大學校、海軍兵學校、海軍主計學校、海軍機關學校等あり、海軍軍人の總數は、二万三千餘にして、軍屬は、凡一千四百(明治三十年末)闕なり。

外交

(外交)

紀元九百年代、神功皇后三韓を征し給ひしより、外交の事益々頻繁に赴き、一轉して支那との交通となり、其文物技藝を輸入せしこと少からず。

二千二百年代、ポルナユガルの商船來りて通商せしより、スペイン、オランダ、イギリス人等來りしが、島原の亂起りしに由り、徳川幕府は、朝鮮、支那、オランダの外、外國船の來航を嚴禁せり。

二千五百十三年(嘉永五年)、北米合衆國の使節ヘルリ、浦賀に來りしより、イギリス、フランス、ロシア等の使節も來り、漸次交を諸外國に修む。現今の條約國は左の如し。

- アジア 韓(朝鮮) 清(支那) 暹羅
- ヨーロッパ イギリス フランス ドイツ オーストリア、ハンガリー



ロシア イタリー スペイン ポルチエガル  
 スウイツルランド ベルギー スウイデン、ノールウエー  
 デンマルク オランダ ギリシヤ  
 アメリカ 北米合衆國 マキシコ ベルギー フラウセル

### 第四章 生業

#### 山林業

舊幕時代は林政殿なりしに維新の際濫伐の弊を生じた

全國を十六大林区に分つ

肉食日に益、盛なるを以て、牧畜の要愈、大なり

**(山林業)** 我國は、到る處多少の森林ありて、林産物からざるのみならず、氣候の調和、水源の涵養に必要なるを以て、政府は、林区を設け、林務官を置きて、これを保護す。

森林の最も大なるものは、木曾(信濃)にして、檜最も多く、陸奥、羽後、上野、下野、越中、伊豆、伊勢、大和、紀伊、日向の諸山林には、松、杉、檜、樺、椴の良材あり。全國の山林は、御料林、官林及び民林の三種に分ち、總反別一千五百餘萬町あり。

**(牧畜業)** 牧畜は、他の生業に比すれば、未だ進歩せず、畜産の重なるものは、牛、馬にして、豚、家禽等これに次ぐ。

牛の産地は、九州及び中國にして、但馬、牛、殊に名あり、馬の産地は、奥羽及







に次ぎて盛んなる輸出品して、畿内近傍及び東海道地方に多く、過半は外國に輸出す。

明治三十年の輸出額を擧ぐれば、生絲類は、一千一百餘萬斤(元價五千八百六十五萬餘圓)にして茶類は、三千二百餘萬斤(元價七百八十六萬餘圓)なり。

### 鑛業

#### (鑛業)

本邦は、地質の複雑なるにより、鑛物の種類多く、近年採鑛法の改良進歩に伴ひて、産額著しく増加せり、就中石炭及び銅最も多く、銀、鐵、金、硫黃、アンチモニー等これに次ぐ。

石炭は九州の西北部、及び北海道の西南部より多く産出し、總額五百餘萬噸、アジア洲中の第一に位し、單に内國の需用を充すのみならず、支那其他への輸出額二百餘萬噸、價格一千一百餘萬圓に達す。

銅の産出多きこと世界中第三に位し、年額三千三百餘萬斤、外國に輸出

するもの亦多し。

### 礦泉

我國の如く礦泉に富む國は稀なり

礦泉は、火山近傍に多く、温度の高低によりて、溫泉、冷泉の別あり、又其中に含有する礦物の性質により、硫黃泉、炭酸泉、鐵泉等に分つ。

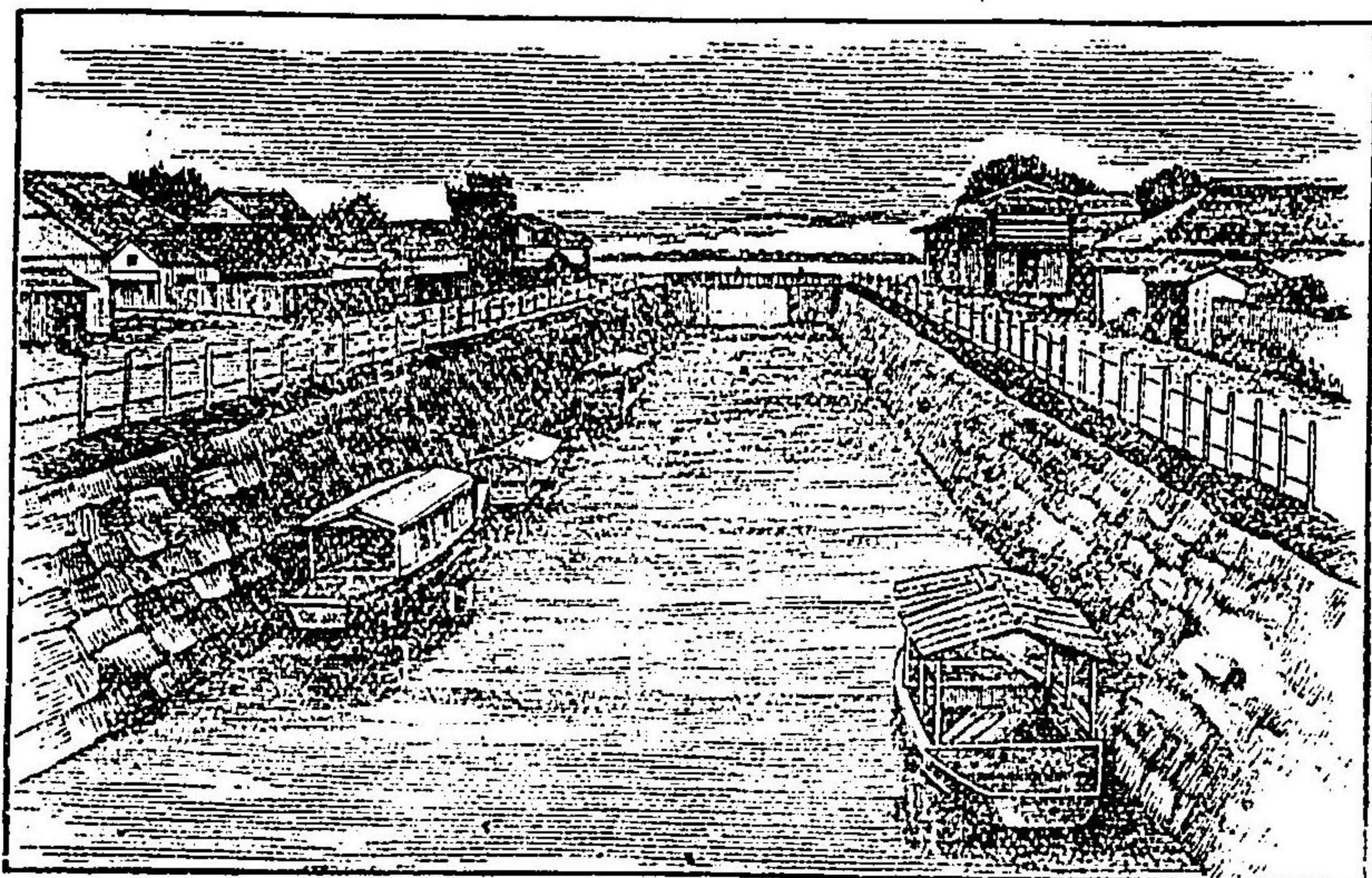
### 工業

#### (工業)

從來我國の工業は、多くは、手工を以てせしにより、規模亦小なりしが、維新以來、尤に西洋の器械を輸入し、近年に至り、益、大工業を見るに至れり。而して其主なる工業會社の中、製絲會社は最も多く、織物會社これに次ぎ、其他鑄物、金屬、摺附木、煉瓦、陶磁器、製紙、造船、セメントに關する會社等種々あり、清酒、麥酒、葡萄酒等の醸造會社も亦少からず。蓋し本邦は、石炭に富み、且つ水力の利用すべきもの多きを以て、工業の原動力に乏しからず。



二十七八年戰役後工業大に起る



琵琶湖の硫水

製絲は養蠶業の行はるゝ地方に多く、綿絲紡績は、大阪府、岡山縣等に盛大にして、明治三十年産出の綿絲總額、二千六百萬貫に達す。

機織業の盛んなるは、京都、桐生、足利、福井等にして、産出の織物總價格は、一億圓を超ゆるに至れり。

陶磁器製造業は、愛知、佐賀、石川の諸縣、漆器製造は、漆樹の特産地たる畿内、東海、東山、北陸諸道、即中國以北の地方に盛んなり。

製紙業中、和紙の製造は、高知縣最も盛んなり、洋紙の製造も、近年大に發達し、東京、神戸等に盛んなり、摺附木製造は、各地甚だ盛んなれども、こ

### 商業

#### 内國商業

れ又東京、神戸を推す。酒類醸造の盛んなるは、兵庫縣、福岡縣、愛知縣、長野縣等にして、醬油製造業は殊に千葉縣に盛んなり。

#### (商業)

我國は、古來農業を以て、立國の大本とし、商工業は、これを等閑に附したりしも、近年人口の増殖甚しく、交通の便大に開くるに至り、内外の商業漸く隆盛となれり。

商業に、内國商業と外國商業との別あり、内國商業に於て、取引の最たる貨物は、米にして、清酒、麥、甘藷、豆類、生絲、織物、茶等これに次ぎ、石炭、木材、魚介、陶器、紙等亦これに次ぐ。内國商業地の最も繁華なる處を擧ぐれば、東京、大阪、名古屋、仙臺、廣島、函館、徳島、福岡等とす。東京は、内外貨物の聚散地にして、大阪には、關西の商品輻輳す、これを我國の二大商業地となす。商工業をして充分發達せしめんが爲に、近來銀行、會社の設



立多く、金銭の融通運轉に便なり。

銀行は、日本銀行を首め、其數一千五百餘あり、日本銀行は、全國の財政を整理し、正金銀行は、横濱にありて、海外貿易を調和す、其他勸業銀行、農工銀行等あり。

政府は發明特許、意匠登録、商標登録等の法を設け、勸業博覽會、共進會等を開きて、大に商工業を奨励し、各地方には、商業會議所及び取引所の設ありて、専ら商業の進歩を圖る。

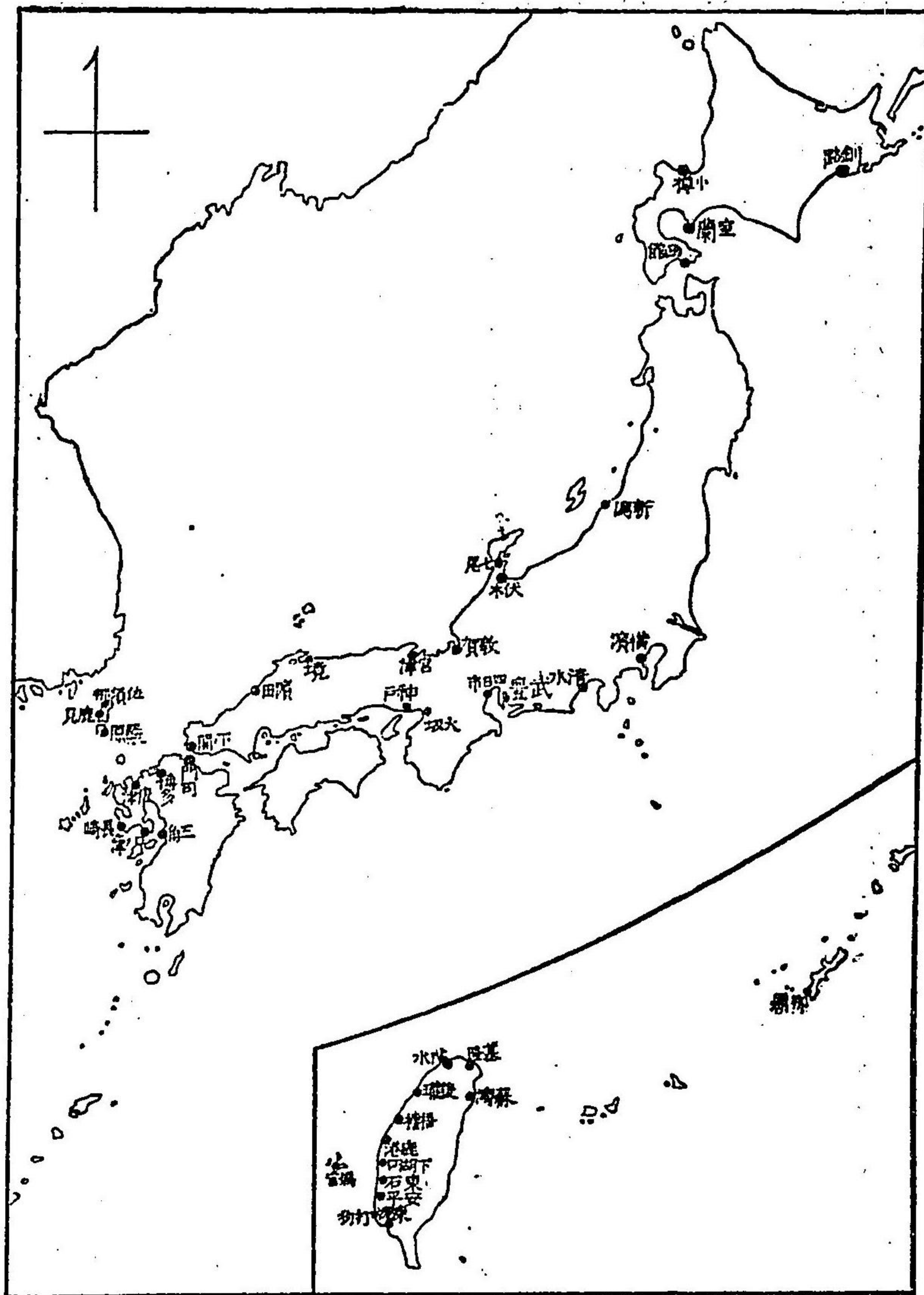
外國貿易は、大に進歩し、輸出入額は、年々増加し、四億圓を越ゆ、輸出品の第一位を占むるものは、生絲にして、これに次ぐを絹布類、茶、米、石炭、銅、摺附木、水産物等とす。其重なる得意先は、北米合衆國を首とし、フランス、香港、支那、イギリス、イギリス領印度、朝鮮、ドイツ、イタリヤ、ロシア領アジア等これに次ぐ。

### 外國貿易

臺灣を加ふる  
ときは五億圓  
に達す

### 輸出品

## 開港場



縮尺五千五百分 100 50 0



輸入品

北米合衆國へは、生糸、綠茶、絹布、米を、支那へは、綿絲、石炭、摺附木を、香港へは、綿絲、石炭、摺附木、銅を、イギリスへは、絹布、麥稈、サナダを、フランスへは、生絲、絹布類を輸出す。

輸入品の重なるものは、綿類を第一とし、米、砂糖、綿絲、金屬及び金屬器、石油、毛布及び毛織物等、これに次ぐ。輸入國は、イギリス第一に位し、イギリス領印度、支那、北米合衆國、ドイツ、香港、朝鮮、フランス、ベルギー、スウイツルランドこれに次ぐ。

イギリスよりは織物、綿織絲、鐵類を、イギリス領印度よりは綿花、乾藍を、

ドイツよりは、砂糖、毛絲、羅紗を、支那よりは、練綿、米、豆類を、

北米合衆國よりは、石油、練綿を輸入す。

開港場

開港場は、從來横濱、神戸、長崎、新潟、函館、大阪の六港に限られたりしが、新に左の二十二港を開かる、こゝこゝなりたり。

駿河國清水

尾張國武豊

伊勢國四日市

長門國下ノ關

豊前國門司

筑前國博多

肥前國唐津

肥前國口ノ津

肥後國三角

對馬國嚴原

對馬國佐須奈

對馬國鹿見

琉球國那覇

石見國濱田

伯耆國境

丹後國宮津

越前國敦賀

能登國七尾(南灣)

越中國伏木

後志國小樽

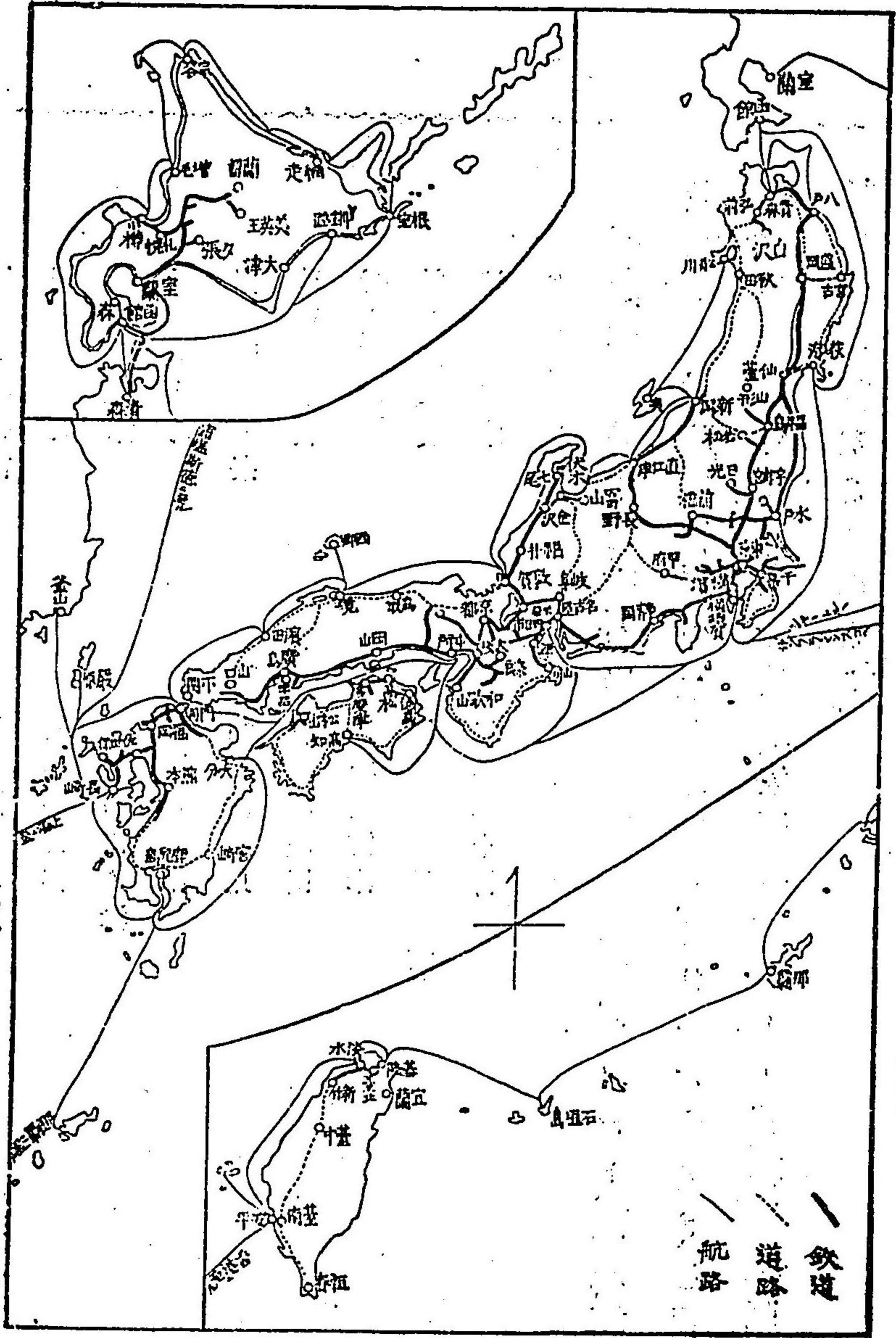
釧路國釧路

膽振國室蘭

室蘭港に於ては、麥、石炭、硫黃、麥粉、木炭、セメント、硫酸、滿俺、礦、晒粉、木材、及板、竹材の輸出に限り、これをなすこゝを得。臺灣の貿易港は、基隆、淡水、安平、打狗にして、茶、砂糖、樟腦は、輸出品の重なるものなり。



# 交通



臺灣に於ては右の外左の諸港を開港と指定せらる、但し當分の中支那形船に限る。

- 臺北縣舊港
- 臺中縣鹿港
- 臺南縣東港
- 臺中縣後壩
- 臺中縣下湖口
- 澎湖嶋媽宮
- 臺中縣梧棲
- 臺南縣東石港

## 交通

## 道路

**(交通)** 交通の便否は、國の進歩に影響すること大なり、維新以後、險阪を鑿ち、鐵道を敷き、航路を擴め、郵便電信を設け、電話を通じ、僅に三十年にして全く面目を一新するに至れり。道路に三種あり、國道、縣道、里道これなり、國道は、東京より道廳、府縣廳、各開港場並に伊勢大廟に達するもの、道、府縣、師團本部及び鎮守府とを連絡するものをいひ、縣道は、各府縣を連接するもの、師團本部より各衛戍地に通ずる



# 鐵道

生業

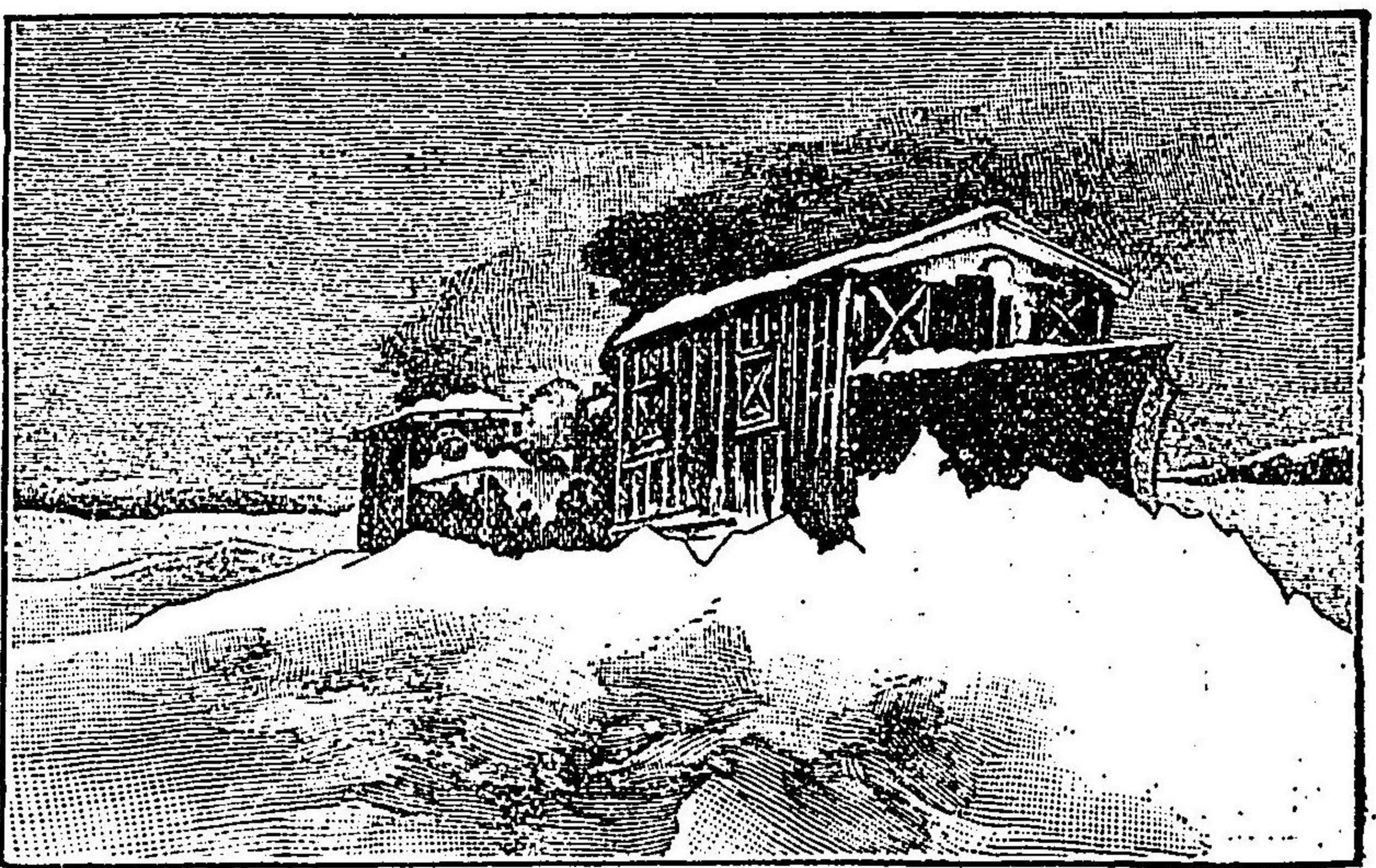
三四

ものをいひ、里道は、此他の通路をいふ。  
 我國の鐵道は、明治五年、東京と横濱との間に設けたるを  
 始とす。爾來線路の延長は、年々増加し、既に開業せるもの、三  
 千五百哩を超ゆ。即ち本州の縦貫線は、北方青森より、南方主  
 田尻（下）に達し、九州に於ては、門司より、八代に至り、北海道に於  
 ては、岩見澤より上川に及べり。而してこれを横ざるべき横  
 貫線は、甚だ多からずと雖も、北海道には、手宮と室蘭との間  
 に一線あり、本州に於ては、東京直江津間に一線ありて、沼垂  
 に延長し、名古屋、福井間に又一線ありて、富山に延長し、武雄、  
 鳥栖間は既に開通して、佐世保に連絡す。此他一部の目的に  
 供せらるゝ小線路は甚だ多し。

臺灣の鐵道には基隆より新竹に至れるものあり、これ亦漸く延びて縱

# 航路

二十七八年戦  
 役後大に航路  
 の擴張を見る



生業

三五

## 雪 中 流 車 運 轉

貫鐵道をなすに至らむ。  
 水運の業は、維新後漸々發  
 達し、船舶の數大に増加し、航  
 路標識の設あり、海上保險の  
 法ありて、航海の術頗る進歩  
 せり。沿海諸港へは、大抵、定期  
 航海あり。外國航路は、東はカ  
 ナダ及び北米合衆國、西は印  
 度及びヨーロッパ、南はオース  
 トリアに至るまで、皆定期  
 航海あり。明治三十一年末に  
 は、西洋形船舶の數千七百餘



艘六十一萬噸に達せり。

航海を業とせる會社の中最も大なるものは、日本郵船株式會社にして、大阪商船株式會社これに次ぐ。日本郵船株式會社の資本金は二百萬圓、横濱を中心として、一方には四日市、神戸、長崎、臺灣、上海、芝罘、天津、牛莊、香港、朝鮮諸港及びウラジオストック等に至り、又一方には荻の濱、函館、小樽、根室、千島列島を往復し、尙ほ海外に定期航海をなす。大阪商船株式會社は資本金五百五十萬圓、大阪を中心とし、専ら多度津、宇和島、宇品、馬關を経て境に至り、又徳島、和歌山等の間、大阪、朝鮮、鹿兒島、琉球、長崎、臺灣間を往復す、又支那、揚子江の航路を開始せり、又近時東洋漁船會社新に起りて、アメリカへの航路を開きたり。

燈臺、其他航路の標識は、太平洋面に多くして、日本海面に少し、これ其艸角の出入、嶋嶼の散布、太平洋に多く、日本海面に少なきを以てなり。

郵便の制度は、明治四年に始まり、明治十年六月、萬國郵便聯合に加盟し、今は、全國到る所に線路開通し、大に便益を得

郵便

るに至れり。

電信は、明治二年始めて、東京、横濱間に架設し、それより、全國に及び、今は國內主要の市邑は、概ね電信局を見るに至れり。又海底電線は、本州と九州、本州と四國、本州と北海道、本州と佐渡、隱岐、九州と四國、臺灣とを通じ、又九州より壹岐、對馬を経て朝鮮に、臺灣より支那の福建省に、又長崎より、上海及びウラジオストックに達せり。

電話は、明治十八年に架設したるを始めとし、今は東京、横濱、京都、大阪、神戸、名古屋、桑名、四日市、堺、長崎、福岡、馬關、札幌及び小樽、其他市邑の一部に行はれ、近時又東京、大阪間に、長距離電話線を架設せり。

電信

電話



## 結論

我國は、アジア大陸の東部に、羅列する島國にして、西南には、朝鮮及び支那あり。西北は、ロシア領シベリアと對し、東は、太平洋を渡りて、アメリカ合衆國に至るべく、南はマレー群島及びオーストロリアに達すべし。面積は大ならざれども、海岸の屈折甚しく、港灣隨て頗る夥し。

我國は、支那、樺太の兩山系南北より來りて、中央に會し、富士火山脈、これを貫通するを以て、到る處山岳峙ち、河流多し、大陸の如き絶大の山岳に乏しきも、頗る風致に富み、河流は、長大ならざるも、其水力は利用すべく、灌域は、概ね肥沃なり。我國は、北緯凡う二十一度より、同五十度に亙り、沿岸は、日

本海流及び對馬海流に洗はるゝを以て、過半は、寒暖中和を得て、アジア洲中同緯度の諸國に比すれば、稍、溫和なり。是を以て、動植繁殖し、佳景の地多く、東洋の花園と稱せらる。

かく、土地肥沃にして、氣候溫和なるにより、穀類の産額甚だ多く、牧畜漸く盛んならんとす。山岳は、木材と鑛物とに乏しからず。沿海は、漁鹽の利、極めて大なり。

人口は、今や四千五百餘萬に達し、支那には、遠く及ばざれども、面積に比例すれば、其右に出で、年々平均四十餘萬の増加を見る。職業は、農業に従事するもの最も多く、商工業者甚だ少し。然れども、限ある國土は、其生産力にも亦自ら限りあるを以て、今後は、大に商工業を、奨励せんことを要す。

貿易は、近古稍、發達の端を開きしも、偶、禁制ありて、殆んど



中絶せしが、維新後頓に長足の進歩をなし、二十七八年戦役後特に一層の盛大を來たし貿易總額は、今や五億圓を超ゆるに至れり。彼のシベリア大鐵道完成の曉は、更に幾多の影響を受くるや必せり。我國の前途、頗る多望なりといふべし。我國は、近年立憲帝政國となり、立法、司法、行政の各部機關、悉く完備し、條約改正の事業も、すべて終りを告げ、上には、親聖仁慈なる萬世一系の天皇坐まし、下には、忠實義勇なる臣民あり、以て萬國無比の國體を成す。開國以來二千五百餘年、未だ嘗て他邦の凌辱を蒙らず。威武益、異域に輝けるもの、誠に以ある哉。

正訂新撰地理 日本之部 終

正訂新撰地理 日本之部 附錄

畿道區劃表

- (一)畿内 五國 山城、大和、河内、和泉、攝津
- (二)東海道 十五國 伊賀、伊勢、志摩、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、武藏、安房、上總、下總、常陸
- (三)東山道 十三國 近江、美濃、飛騨、信濃、上野、下野、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後
- (四)北陸道 七國 若狹、越前、加賀、能登、越中、越後、佐渡
- (五)山陰道 八國 丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐
- (六)山陽道 八國 播磨、美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長門
- (七)南海道 六國 紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊豫、土佐
- (八)西海道 十一國 筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後、日向、大隅、薩摩、壹岐、對馬
- (九)北海道 十一國 渡島、後志、石狩、天鹽、北見、膽振、日高、十勝



行政區劃表

區劃名	官廳所在地	管轄區域
北海道廳	札幌區	北海道
○東京府	東京市	武藏の内一市八郡、伊豆七島、小笠原島
○京都府	京都市	山城丹後丹波五郡
○大阪府	大阪市	河内和泉攝津の内一市四郡
○神奈川縣	横浜市	相模武藏の内一市三郡
○兵庫縣	神戸市	播磨但馬淡路攝津の内一市三郡、丹波の内二郡
○長崎縣	長崎市	壹岐對馬肥前の内一市六郡
○新潟縣	新潟市	越後佐渡
○埼玉縣	浦和町	武藏の内九郡
○千葉縣	千葉町	安房上總下總の内六郡
○茨城縣	水戸市	常陸下總の内三郡

○群馬縣	前橋市	上野
○栃木縣	宇都宮市	下野
○奈良縣	奈良市	大和
○三重縣	津市	伊勢伊賀志摩紀伊の内二郡
○愛知縣	名古屋市	尾張三河
○静岡縣	静岡市	遠江駿河伊豆七島を除く
○山梨縣	甲府市	甲斐
○滋賀縣	大津市	近江
○岐阜縣	岐阜市	美濃飛騨
○長野縣	長野市	信濃
○宮城縣	仙臺市	陸前の内一市十一郡磐城の内三郡
○福島縣	福島町	岩代磐城の内七郡
○岩手縣	盛岡市	陸前一郡陸中の内一市十一郡陸奥の内一郡
○青森縣	青森市	陸奥の内二市八郡
○山形縣	山形市	羽前羽後の内一郡



○秋田縣	秋田市	羽後の内一市八郡、陸中の内一郡
○福井縣	福井市	若狹、越前
○石川縣	金澤市	加賀、能登
○富山縣	富山市	越中
○鳥取縣	鳥取市	因幡、伯耆
○島根縣	松江市	出雲、石見、隱岐
○岡山縣	岡山市	美作、備前、備中
○廣島縣	廣島市	備後、安藝
○山口縣	山口町	周防、長門
○和歌山縣	和歌山市	紀伊の内一市七郡
○德島縣	徳島市	阿波
○香川縣	高松市	讃岐
○愛媛縣	松山市	伊豫
○高知縣	高知市	土佐
○福岡縣	福岡市	筑前、筑後、豊前の内一市四郡

○大分縣	大分町	豊後、豊前の内二郡
○佐賀縣	佐賀市	肥前の内一市八郡
○熊本縣	熊本市	肥後
○宮崎縣	宮崎町	日向
○鹿兒島縣	鹿兒島市	大隅、薩摩
○沖繩縣	那覇區	沖繩諸島

人口一覽表

畿内	人口(二十九年未調査)	面積(方里)	一方里ノ人口
東海道	二、六三七、三四六	四四五	五、九一八
中仙道	九、八四〇、三三一	二、六五八	三、七〇一
舊奥羽	四、四〇六、一三九	二、六〇二	一、六九三
北陸道	四、七〇四、六五九	四、二四七	一、二〇八
山陰道	三、八八八、六五五	一、五七七	二、四六五
附録	一、八四〇、二七六	一、〇八七	一、六九二



附錄

山陽道	四、二四二、八八三	一、五七〇	二、七〇二
南海道	三、六九三、一九八	一、五六一	二、三六三
西海道	六、〇九三、七六九	二、六一七	二、三二八
北海道	五〇八、八七〇	六、〇九五	八三
佐渡	一一三、七二〇	五六	二、〇一九
隱岐	三五、〇七一	二二	一、六〇二
淡路	一九〇、七七一	三六	五、二〇〇
壹岐	三六、一五七	八	四、一九〇
對馬	三三、二二六	四四	七四三
琉球	四四〇、八八九	一五六	二、八一〇
小笠原島	二、四〇四	四	五三九
總計	四二、七〇八、二六四	二四、七九四	一、七二三

訂新撰地理日本之部附錄終

明治三十二年二月廿六日印  
 明治三十二年三月九日發  
 明治三十三年一月十八日訂正五版印刷  
 明治三十三年一月廿一日訂正五版發行  
 明治三十四年二月十九日再訂十二版印刷  
 明治三十四年二月廿三日再訂十二版發行

訂新撰地理日本之部  
 定價金六拾錢



發兌元

發行者  
 代表者  
 印刷者  
 印刷所

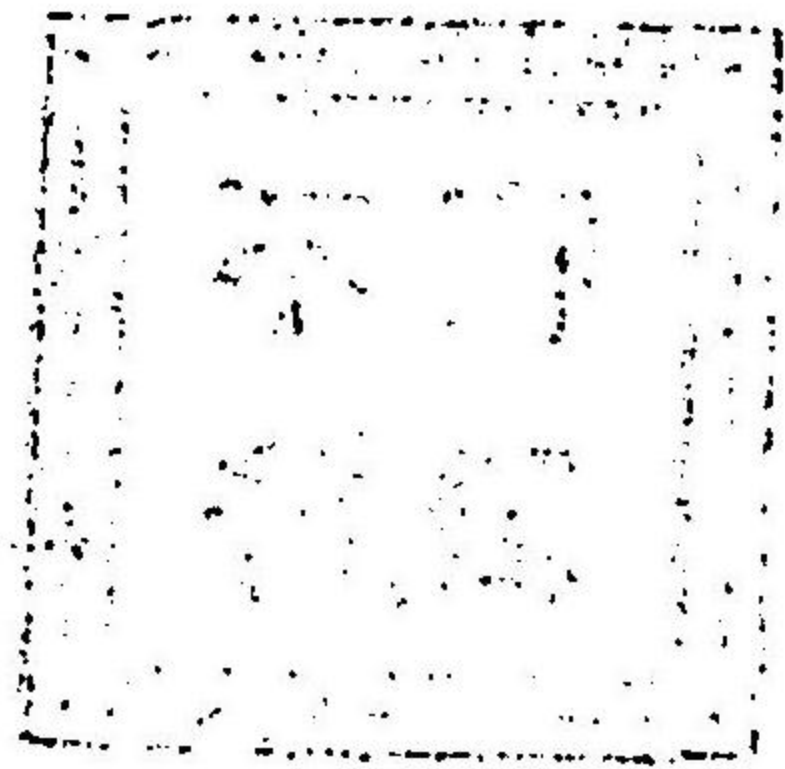
編述者

山 上 萬 次 郎  
 東京市神田區裏神保町九番地  
 合資會社 富山房  
 合資會社 富山房社長  
 東京日本橋區樂研堀町三十三番地  
 同 所 厚 仁 科 衛  
 (電話浪花一四六番) 信 舍  
 (明治廿九年六月設立) 合資會社 富山房  
 長距離(電話本局)電報 ヤマフ  
 加入(一〇三六番) 電報 號碼



...

...



...

...

...

...



地理學士上山萬次郎先生著述目錄  
 地理學部

書名	編述ノ要項	冊數	頁數	行數	文字	插圖版數	定價
新撰大地文學 (上篇 完結)	卷之一 地球星學及ヒ氣象學	一	二〇〇			二六	〇、五〇
	卷之二 靜的海洋學	一	一五二			二四	〇、五〇
	卷之三 動的海洋學	一	二二八	一四三三	五號	一五	〇、五〇
	卷之四 宇宙開闢論	一	一一七			三二	〇、五〇
	卷之五 地圖製作法	一	一四〇			三四	〇、五〇
	卷之六 地球星學續篇	一	凡ソ			二五	〇、二五
新撰中地文學	新撰中地文學ヲ基礎トシ、文部省ノ教科細目ヲ參照ス。教科用、參考用、講習用ニ適ス。	一	三六一	一一二五	四號	三三	一、二〇
近世地文學教科書	新撰中地文學ノ要點ヲ摘シ、說明簡約ニシテ教科用ニ適ス。材料ハ一層豐富ナリ。最モハツクスレー氏ノ脈絡的敘述ニヨリ、隅田川ヲ以テ始リ、太陽ヲ以テ終フ。首尾貫通、説明簡潔。最モ教科用ニ適ス。	一	二二八	一一二五	四號	九〇	〇、五〇
新撰普通地文學	材料極メテ豐富、高級ノ教科用及ビ參考用ニ適ス。	一	二一五	一三二五	四號	五三	〇、七〇
訂新撰地文學	新撰地文學ヲ節約シテ、初級用ニ適セシメタルモノ。	一	二八四	一四三二	(六號) 九三	三二	一、一〇
訂新撰小地文學	帝國教育會ニ於テ、中等學校教員志望者ノ爲メニ、講演セル筆記ノ大要ニシテ、材料ト圖面ト共ニ饒多。	一	一一二	一三二五	四號	四二	〇、五〇
地文學講義		一	一四	一五三七	(六號) 五三	四四	〇、七五

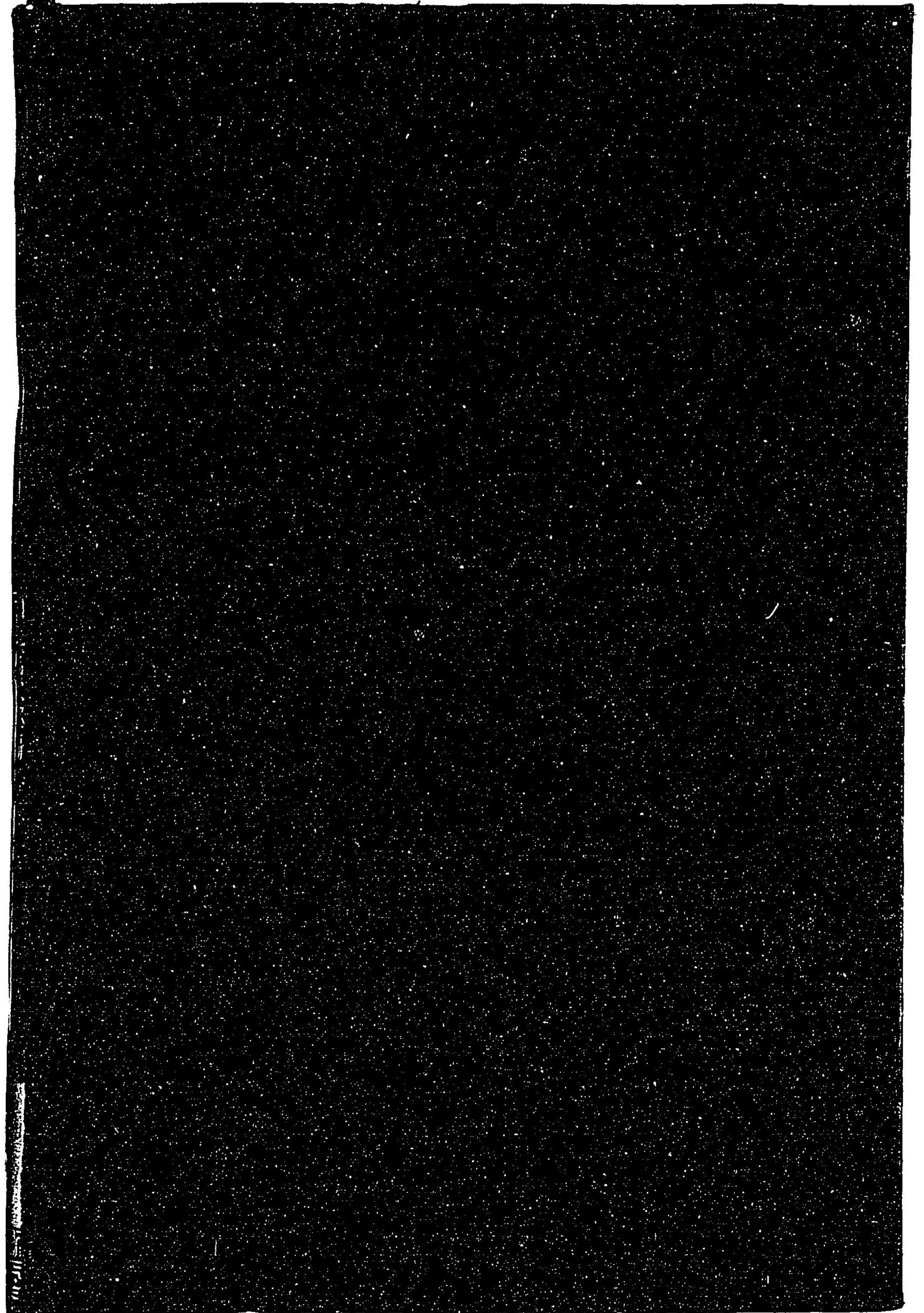
東京書肆 合資會社 富山房發兌



84

51









022001-001-1

84-51

新撰地理(中等教育地理科教科用書)

山上 万次郎/著

M34

ADA-0267





